

これからの時代に必要となる資質・能力の育成 —— カリキュラム・マネジメントの視点を通して（2年次） ——

友 利 久美子 ・ 寺 井 俊 博 ・ 永 田 聖 子 ・ 佐久田 伸 一
山 里 崇 ・ 平 良 博 志 ・ 仲 里 健 ・ 渡慶次 克 磨
比 嘉 展 寿 ・ 後 藤 直 樹 ・ 玉 城 光 師

キーワード 資質・能力 カリキュラム・マネジメント 新学習指導要領
学校教育目標 教科等横断的な視点 PDCAサイクル
人的・物的資源の活用 リーフレット ハンドブック



I はじめに ～1年次の研究を踏まえて～

本総合教育センタープロジェクト研究は「これからの時代に必要となる資質・能力の育成ーカリキュラム・マネジメントの視点を通して（2年次）ー」をテーマとし、今年度は2年研究の2年次となる。

1年次の研究では、まず、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校へ「カリキュラム・マネジメント」に関する意識調査・実態調査（回答数：教諭 867 名、管理者（校長）302 校）を実施し、本県の現状及び課題を把握、その解決策を探った。調査内容として①カリキュラム・マネジメントの認知度、②カリキュラム・マネジメントの3つの側面の取り組み状況、③カリキュラム・マネジメントの実践状況④カリキュラム・マネジメントを推進する際の課題、の4つの項目を提示し、調査を実施した。調査結果から小学校・中学校・高等学校・特別支援学校で、おおよそ共通してあげられた現状と課題が次の4点である。

- ①教師が多忙で日々の指導に追われ、マネジメントする余裕がない。
- ②カリキュラム・マネジメントの研修が不足している。
- ③教職員一人一人がカリキュラム・マネジメントの主体者である認識が十分ではない。
- ④学年間や教科間の系統性や関連性及び、教科等横断的な組織等、教育課程の編成が十分に行われていない。

次に、理論研究として「これからの時代に必要となる資質・能力とは何か」「カリキュラム・マネジメントの進め方や取り組み方について」を考察、再確認し、6つのカリキュラム・マネジメントタイプに整理しまとめた。2年次の研究にあたっては、1年次の意識調査・実態調査の結果と理論研究を踏まえ「これからの時代に必要となる資質・能力の育成」に向け、実践研究を進めていくこととした。

II 研究の目的と方法

1 研究の目的

1年次の研究で構築した理論に基づいた実践研究を進め、児童生徒の資質・能力の育成につなげることができたかを検証する。そして、学校・行政機関等が活用できるよう見やすく、分かりやすい形（リーフレット、ハンドブック）で児童生徒の資質・能力の育成へ向けた取り組みを発信する。

2 研究の方法

1年次の研究でまとめた理論に基づき、「6つのカリキュラム・マネジメントタイプ」と「カリキュラム・マネジメントに取り組む際の5つの視点」を柱に、研究協力校の実態を踏まえ実践研究を行った。その際、11名のプロジェクト研究委員を校種・教科等横断的にチーム編成し、チームで学校の実態とニーズに応じた支援を行うことを共通確認し、実践研究を行うこととした。1チーム3～4名で3チーム編成し、1チーム2～3校を研究協力校として、小学校1校・中学校2校・高等学校3校・特別支援学校1校の計7校の実践研究を通して、今年度の研究の目的に迫ることとした。1年次の理論や2年次の実践研究の目的や柱となる視点においては、研究協力校と共有を図り、その後、各研究協力校の実態調査を行った。その具体的な実践研究計画を表1に示す。校種や学校の実態に応じた実践であるため、時期や内容等に若干のずれはあるが、実態調査や理論研修の時期等大まかな実践の流れは共通している。

表1 実践研究計画のながれ

月	プロジェクト研究委員会の動き	研究協力校 7校の動き						
		A 小	B 中	C 中	D 高	E 高	F 高	G 特支
4	・1年次の理論研修 ・今年度の研究目的、方針の話し合い・テーマの確認 ・「ヒヤリングシート」(1年次作成)加筆・修正							
5	・2年次の年間研究計画作成 ・チーム編成 ・実践研究の評価方法や評価時期や回数の検討 ・企画書(研究協力校との打ち合わせ用)の作成	打合せ C A P 理論研 D	打合せ C A P 理論研 D	打合せ C A P 理論研 D	打合せ C A P 理論研 D	打合せ C A P D	打合せ C A P 理論研 D	打合せ C A P 理論研 D
6	・学校・行政機関等が活用できるよう見やすく、分かりやすい発信方法の検討	教材研						
7	・リーフレットの内容・構成の検討、作成	研究 授業	教材研 C A P	研究 授業	理論研 C A P D			教材研
8	・ハンドブックの内容・構成の検討、作成	教材研						
9	・実践研究の振り返り(2年次後半に生かすための評価)	教材研	教材研 D	教材研	理論研 C A P D	教材研	理論研	理論研
10	・研究報告会の発表方法の検討	研究 授業		研究 授業		文化祭	校内 研修	校内 研修
11	・各実践研究の振り返り(次年度に生かすための評価)	研究 授業	研究 授業	研究 授業				
12	・プロジェクト研究委員会の振り返り(次年度に生かすための評価) ・リーフレット、報告書の原稿完成	校内 研修 C A	教科 部会 C A	C	校内 研修 C A P D	C A	校内 研修 C A P	校内 研修 C A P
1	・研究発表会原稿完成 ・今年度の成果と課題を生かし、次年度のテーマ検討	校内 研修 C A	教科 部会 C A	A		C A		
2	・研究報告会、リーフレット配布 ・Web ページでの公開	校内 研修 P	P	P				
3	・ハンドブック完成・配布						海外 研修 C A	

(C:評価、A:改善、P:計画、D:実施)

Ⅲ 研究内容

2年次である今年度は、1年次研究「これからの時代に必要となる資質・能力の育成ーカリキュラム・マネジメントの視点を通してー」で構築した理論に基づいた実践研究を進め、児童生徒の資質・能力の育成につなげることができたかを検証する。

1 1年次研究で構築した理論

(1) 「これからの時代に求められる資質・能力」とは

本研究では、「これからの時代に必要となる資質・能力」のとらえ方について「生きる力」の理念を踏まえたこれからの社会の中で自立的に生きるために必要な力であるとともに、「生きて働く『知識及び技能』『未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』『学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』」3つの要素を柱としたものであることを確認した。

児童生徒に「これからの時代に必要となる資質・能力」を育成するためには、各学校が目目の児童生徒の実態を踏まえた上で、どのような資質・能力を育成するかを具体化・明確化することが大切であり、その具体化・明確化したのが学校教育目標・目指す児童生徒像ということになる。

具体的には、「各教科等において育む資質・能力」「教科等を越えた全ての学習の基盤として育まれ活用される資質・能力」「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」などがあり、資質・能力をとらえる際には、決して学習内容を軽視するのではなく、資質・能力と学習内容は互いに関連し合うものであることを留意する必要がある。

(2) カリキュラム・マネジメントの視点とは

カリキュラム・マネジメントの目的は、各学校の教育活動の質の向上を図っていく取り組みであり、その取り組みの主体はそれぞれの学校である。各学校においては、実態把握を基に教育活動の質の向上に向け「教科等横断的な視点」「教育課程の評価改善」「人的・物的資源の活用」が手立てや手段として、学習指導要領総則（平成29年告示）に明記された。

① 「教科等横断的な視点」とは、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくことである。何のために教科等横断をさせるのかを明確化した上で、関連させる観点を設定する必要がある。その観点の具体例としては、「育てたい資質・能力」「学習内容」「教育課題」「学習方法」などがあるが、それぞれの学校の実態に応じて観点を設定し、学校教育目標の実現に向けた学校教育活動の質の向上が図られるよう留意しなければならない。

② 「教育課程の評価改善」とは、教育内容の質の向上に向けて、児童生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づいた実態把握を丁寧に行い、教育課程を編成、実施、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立することである。PDCAサイクルに取り組む際には、特定の型や順序にこだわるのではなく、教育活動と経営活動の質の向上に向けてのマネジメントサイクルを常に回し続けることが大切である。自校の現状や実態をしっかりと把握し、どのような課題があるかを見極め、改善に向けて何に取り組むべきかを焦点化することが重要である。

③ 「人的・物的資源の活用」とは、教育内容と教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせることである。その際、OJTや教職員同士の学び合いなど、学校内の様々な人材を生かす視点を持つこと、地域の資源や人材等の外部資源を活用し、連携・協働しながら教育活動の質の向上につなげる工夫が必要である。

本研究では、カリキュラム・マネジメントを、各学校が主体となり、学校教育目標の実現に向けて学校の教育活動と経営活動の全体を工夫改善していきながら、学校教育活動の質の向上を図ることと捉える。そして、このようなカリキュラム・マネジメントの考え方に基づいて取り組むことをカリキュラム・マネジメントの視点を通した取り組みとした。また、特定の型や手法にとらわれることなく、各学校の実態を踏まえながら、それぞれの学校で最もよい手立てを考え、創意工夫を重ねながら講じることが大切である。

2 実践研究の実践

カリキュラム・マネジメントは、各学校が主体となり学校教育目標・目指す児童生徒像の実現に向けて学校教育活動の質の向上を図るものである。また、各学校の現状や抱える課題によって取り組む内容は当然異なり、それぞれの学校の進め方や取り組み方法の違いによって、その姿は多種多様である。そこで、本総合教育センター1年次研究において取り組みの主体と内容を基に整理した。2年次研究では、6つのカリキュラム・マネジメントタイプを各学校の実態に照らし合わせ、自校の強み・

表2 6つのカリキュラム・マネジメントタイプ

カリマネタイプ	内容	担当・取り組みの主体
児童生徒のカリキュラム・マネジメントタイプ	自己の学びに関すること	児童生徒自身
授業のカリキュラム・マネジメントタイプ	個々の授業づくり 担当者の授業づくりや単元計画に関する工夫改善	授業担当者
教科・領域のカリキュラム・マネジメントタイプ	各教科の授業づくり 各教科における授業づくりや単元計画に関する工夫改善	各教科主任
学級のカリキュラム・マネジメントタイプ	学級経営 学級の児童生徒の実態を踏まえた学級づくりの工夫・改善	担任
学年のカリキュラム・マネジメントタイプ	学年経営 担当学年の児童生徒の実態を踏まえた学年経営の工夫改善 学年団としての基本方針、実践、見直し等	学年主任
学校のカリキュラム・マネジメントタイプ	学校経営 学校経営全体計画、グランドデザイン、学校教育目標の具体化・共有化、校内研修テーマの推進等	教務主任・教頭・校長

弱みを踏まえ、どの内容から取り組むか、担当や主体をどこにおいて共有を図るか等、表2の6つのカリキュラム・マネジメントタイプの視点から実践へつなげることにした。

本実践研究では、小学校1校、中学校2校（市町村立の中学校1校・県立の中高一貫校1校）県立高等学校3校（普通科2校・商業科1校）県立高等特別支援学校1校の計7校を研究協力校とした。学校の実態を6つのカリキュラム・マネジメントタイプに照らし合わせ、カリキュラム・マネジメントの3つの側面を意識した実践を行うことで2年次の研究目的である児童生徒の資質・能力の育成（学校教育目標・目指す児童生徒像）の実現につなげることができたかを検証する。また、1年次の理論研究やアンケート調査結果を踏まえ、何をどのようにすればより効果的な取り組みになるか等、具体的な取り組みの視点をまとめた表3の活用を図りながら実践研究を進めた。実践研究は1年間であるため、リーフレット（2月完成）、ハンドブック（3月完成）にて1年間の実践の詳細は紹介する。（本報告書の記載は12月現在までの実践を記載）

表3 カリキュラム・マネジメントに取り組む際の5つの視点（視点①～視点⑤順不同）

視点①：学校教育目標を具体化・明確化する（みえる＝視覚化・具体化）

マネジメントとは、目標を設定し、適切な手段を選択・実施して、その目標を達成していく「プロセス」なので、学校教育目標をしっかりと設定し、「目指す子ども像」や「付けたい力」を具体化しましょう。ポイントは明確にその力をイメージすることができるかどうかです。また、学校教育目標を実現するにはどのような工夫・改善が有効なのか、児童生徒一人一人の成長につなげるにはどのようにすればよいのかなどを常に意識することが大切です。

視点②：現状の実態把握をする（つかむ＝現状理解）

カリキュラム・マネジメントは、課題解決や改善を目指すので、何をどのように変えるのかを明らかにする評価・改善段階が「鍵」となります。課題解決のためには実態把握や評価が必要ですので、マネジメントサイクルはC（評価）・A（改善）から始めることがポイントです。平成29年度の本総合教育センターのプロジェクト研究では、「R（リサーチ・課題の把握・共有化）－PDCA」を推奨しています。より効果を上げるためには、まずは現状や実態をしっかりと把握し、改善に向けて何に取り組むべきかを焦点化することが重要です。

視点③：共通理解・共通認識を図る（つながる＝共有・チーム学校）

カリキュラム・マネジメントは管理者のみとしてとらえるのではなく、教職員一人一人がカリキュラム・マネジメントの当事者であり、自分ごととしてとらえる工夫が必要です。そのためには、職員間で課題を共有し、どのような児童生徒を育てたいのか、どのような資質・能力を育成したいのか、職員同士で話し合い、共通理解を図ることを推奨します。また、校内研修をワークショップ型で行うことも有効です。平成29年度の本総合教育センターのプロジェクト研究では、ワークショップ型の校内研修の具体的な進め方についてまとめています。

視点④：教育活動と経営活動をつなげる（つなげる＝横断・関連付け・活用）

何のために教科等横断をするのかを明確にした上で、関連させる観点を設定しましょう。設定した観点から相互に関連付けられそうな単元などを探し整理していきましょう。観念の具体例としては、「育てたい資質・能力（例：論理的思考、主体的態度など）」「学習内容（例：総合的な学習の時間、道徳など）」「教育課題（例：キャリア教育、環境教育、安全教育、食育など）」「学習方法（例：言語活動、調べ方など）」それぞれの学校の実態に応じて観点を設定し、学校教育目標の実現に向けた教育活動の質の向上が図れるように留意しましょう。また、人的・物的資源についても、その目的を明確に持つことが大切です。人的・物的資源の具体例としては、校内外の「人材」「時間」「情報」「施設・設備」「教育内容」などがあります。カリキュラム・マネジメントに取り組む際には、学校の教育活動と経営活動の全てに関してつながりを意識し、教育活動の質の向上を図りながら、学校教育目標の実現を目指しましょう。

視点⑤：より良いものへ発展させるために回し続ける（まわす＝サイクル）

カリキュラムを見直し、より良いものへと発展させていくプロセスが、マネジメントサイクルです。教育活動の質の向上に向けて取り組んだことを、やりっぱなしにはせず、工夫改善を続けながら、マネジメントサイクルを途切れさせず、常に回し続けていきましょう。

3 児童生徒の資質・能力の育成につなげることができたか

カリキュラム・マネジメントは、各学校が主体となって学校教育目標・目指す児童生徒像の実現に向けて学校教育活動の質の向上を図るものであり、各学校の現状や抱える課題によって取り組む内容は当然異なってくる。それぞれの学校の進め方や取り組み方法の違いによって、その姿は多種多様であることを踏まえ、児童生徒の資質・能力の育成につなげることができたかについての検証方法も異なってくると考える。しかし、目指すゴールは学校教育目標・目指す児童生徒像の実現である。「学習評価の在り方ハンドブック」（文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2019）において、カリキュラム・マネジメントの一環としての指導と評価について「各学校は、日々の授業の下で児童生徒の学習状況を評価し、その結果を児童生徒の学習や教師による指導の改善や学校全体としての教育課程の改善（中略）教育活動の質の向上を図る」とし、評価は、各学校において組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントの中核的な役割を担うとし、児童生徒の学習改善、教師の指導改善につながるものとしていくことが示されている。また、赤沢早人（2012）は、評価は、教育目標（重点目標）にもとづいて教育成果が判断されるとし「教育活動がどのように子どもたちの成長発達につながったか、『客観的評価』は数量で表される方法に限りません。ビデオの映像や授業中の教室の写真、子どもたちのノートや感想文などは、角度を変えれば教育活動の成長を評価する貴重な資料になる」と述べている。つまり、各学校が育成を目指す資質・能力である学校教育目標・目指す児童生徒像に児童生徒がどれだけ近づくことができたか、また、学校教育目標・目指す児童生徒像に児童生徒をどれだけ近づけることができたか、その評価の方法や時期は学校の実態や取り組みに応じて多様になる。

本研究では、表4にまとめた評価の目的や視点・方法で児童生徒の変容や成長をみとることとする。

表4 評価の目的や視点・方法

評価の目的	学校教育目標・目指す児童生徒像に向け、児童生徒の成長や学習改善、教師の授業改善、教育活動の質の向上を図る。
評価の視点	〔児童 生徒〕学校教育目標・目指す児童生徒像にどれだけ近づくことができたか。 〔教師 学校〕学校教育目標・目指す児童生徒像にどれだけ近づけることができたか。 児童生徒の変容をもとに仕組みや手立てがどうであったか。
評価の方法	〔児童 生徒〕授業や行事等教育活動の発言や行動観察、ノートやワークシート記述、テスト結果、学校評価・意識調査等各諸調査のデータ結果を活用する。 〔教師 学校〕児童生徒の変容、学校評価・意識調査等諸調査のデータ結果を活用する

IV 学校・行政機関等が活用できるよう見やすく、分かりやすい形での発信

本研究の目的は、1年次で構築した理論に基づいた実践研究を進め、児童生徒の資質・能力の育成につなげることができたかを検証する。その成果や具体的な取り組みが各学校の学校教育目標・目指す児童生徒像の具現化へ向けた教育活動へつながるよう発信方法を工夫する。発信方法の工夫として学校・行政機関等が活用できるよう見やすく、分かりやすい形（リーフレット、ハンドブック）を作成することとした。

1 リーフレット「カリキュラム・マネジメントガイド」作成の実際

(1) リーフレット作成の基本的な考え方と目的

本総合教育センターは、沖縄本島の学校のみならず離島・へき地校の教育活動及び、学力保障に向けた学校支援の役割を担っている。離島・へき地校は地理的条件から、まだまだ研修の機会や情報共有に差があると考えられる。さらに、1年次のアンケート調査結果より「カリキュラム・マネジメントの視点での取り組み」において、学校間差が課題であった。そこで、実践の視点やポイントを絞り情報を精選した形で発信することで、カリキュラム・マネジメントの視点の共有や意識改善を課題とする学校が活用できる資料、離島・へき地の小規模校・単学級という小さな組織からでもカリキュラム・マネジメントの視点で学校・学級経営、日々の授業改善を始めるきっかけとなるようリーフレット「カリキュラム・マネジメントガイド」を作成した。

(2) リーフレット作成に当たって留意したこと

リーフレット「カリキュラム・マネジメントガイド」の作成に当たっては、学校教育目標・目指す児童生徒像を意識した授業づくりに向けた指導案や「単元配列表」の作成手順、「チェックリス

ト表」を掲載し、個人や学校全体で現状の把握と共有を図ることができ、実践に生かせるような視点で作成した。また、各学校が自校の良さをさらに伸ばし、特色ある教育活動の実現へ向けて活用ができるよう掲載内容の精選に留意した。

(3) リーフレットの内容と構成

リーフレットは、A4 サイズを横つなぎで4ページの両面、計A4 サイズ8ページで、両側から織り込む形で作成した。年間の組織的取り組みと授業づくりの流れや「単元配列表」「指導案」の作成手順等、学校の教育活動全体と授業づくりのつながりを意識した構成となっている。また、表紙等に用いているミンサー模様には、全ての児童生徒が現在も未来も他者とのつながりの中で自己実現を図りながら、幸せでよりよい人生を歩んで欲しいという願いを込めて作成している。リーフレットの内容は以下のとおりである。(①～⑧はページ)

①表紙：これからの学校教育

②カリキュラム・マネジメントの3つの側面

③Q&A：振り返りの視点、資質・能力、各キャリアステージでカリキュラム・マネジメントの関わり方

④実践事例 小学校：学校・授業のカリキュラム・マネジメントタイプ1事例

⑤実践事例 中学校：教科・領域のカリキュラム・マネジメントタイプ2事例

実践事例 高等学校：学校・学級・授業・生徒のカリキュラム・マネジメントタイプ3事例

実践事例 特別支援学校：学校・生徒のカリキュラム・マネジメントタイプ1事例

⑥「単元配列表」の作成手順

⑦目指す資質・能力を意識した授業の共有に向けた「学習指導案」の作成手順

⑧カリキュラム・マネジメントの3つの側面での「チェックリスト」表

(4) リーフレットの活用方法

各学校が校内研修等で、「チェックリスト」表を活用し、学校全体で学期や年度の振り返りを行い、次学期や次年度の教育活動の改善へ生かす。また、目指す資質・能力を意識した授業の共有に向けた「学習指導案」の活用で、日々の授業改善へつなげることが活用方法としてあげられる。学校教育目標・目指す児童生徒像に向け、担任、学年等という個人や小規模の組織で取り組む場合や学校全体で取り組む際に、リーフレットを活用して日々の授業改善や教育活動の質の向上に向け、各学校の実態に合わせて活用が図られることを期待する。

2 ハンドブック「カリキュラム・マネジメントのポイントと実践事例の紹介」作成の実際

(1) ハンドブック作成の基本的な考え方と目的

作成の目的は、ハンドブックにまとめた6つのカリキュラム・マネジメントタイプの実践と自校の実態や特色と照らし合わせながら、カリキュラム・マネジメントのどの側面から取り組むことが有効かを学校全体で話し合い、各学校の教育活動の質の向上に向け、取り組む際の参考資料として活用を図ることを目的として作成した。

(2) ハンドブックの作成に当たっての留意点

作成に当たって留意したことには以下の3つがあげられる。1つめに、各学校が学校教育目標の実現に向けた取り組みがイメージできるよう、1年間の取り組みを実践事例を通して示すこととした。2つめに、各学校が作成している教育計画を大切にしながら、見直しや付け足しを行い、実態に即した最もよい手立てを考え、創意工夫を重ねることができるよう具体的な取り組み手順等を提案することとした。3つめに、これからカリキュラム・マネジメントの視点でやってみようと思う全ての学校が自校と重ねて参考にできるよう、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の実践事例を掲載することとした。

(3) ハンドブックの内容と構成

各学校がカリキュラム・マネジメントに取り組む際に、疑問や戸惑いが解消でき、できそうと思える入門的な内容と構成を意識した。内容と構成は以下の通りである。

○第1章「理論編」カリキュラム・マネジメントの全体構造・3つの側面・6つのタイプ・取り組む際の5つの視点。

○第2章「実践編」理論を踏まえた実践事例7つと実践事例から学ぶポイント

○第3章「Q&A 編」

○第4章「実践資料」

(4) ハンドブックの活用方法

各学校での「カリキュラム・マネジメント」の視点を通した「資質・能力」の育成や充実の一助となるよう、学校教育の充実や学習指導要領の実施に向けた学校支援に資することを目指している。そのため、ハンドブック「カリキュラム・マネジメントのポイントと実践事例紹介」の汎用的な活用が図れるよう、Webサイトよりデータをダウンロードし、各学校等が実態に合わせて工夫・改善、修正を行いながら活用できるようにした。

V まとめ

1 成果、課題の改善策

本研究は「これからの時代に必要となる資質・能力の育成ーカリキュラム・マネジメントの視点を通してー」をテーマとし、2年間研究を行ってきた。2年次の目的は、1年次研究で構築した理論に基づいた実践研究を進め、児童生徒の資質・能力の育成につなげることができたかの検証と学校・行政機関等が活用できるよう見やすく、分かりやすい形での発信である。児童生徒の変容や成長、手立てや取り組み、成果はリーフレット、ハンドブックに掲載されているため、以下は各種諸調査（学校評価、全国学力学習状況結果、Assess：学校環境適応感尺度を用いた調査等）の結果や振り返り記述、発言や行動観察等、児童生徒の変容を基にまとめたものである。

(○成果 ◆課題の改善策)

①A 小学校（授業、学年、学校のカリキュラム・マネジメントタイプ）

【カリキュラム・マネジメントの視点】PDCAサイクル

【担当・取り組みの主体】児童、授業担当、学年主任、研究主任、教務主任、教頭、校長

【身に付けさせたい資質・能力】論理的思考力

全国学力学習状況調査や学校評価等、諸調査の結果分析を各学年で行い、全体で成果と課題を共有し、良さをさらに伸ばす、課題を改善する等の視点や手立てを共通実践することで、組織として計画的に取り組むことができた。具体的手立てとしては、指導案に学校教育目標・目指す児童像を明記して単元・授業で育成したい資質・能力である論理的思考力の育成を意識した。さらに、単元配列表を作成し、職員だけでなく児童とも学期、学年のゴールを見据え振り返りの評価を共有し、次の学びに生かす教育活動を行った。

○児童：全国学力学習状況調査結果は、国語においては全国平均差が縮まり（-1.8ポイント）、算数は全国平均を上回る（+1ポイント）結果となり、特に論理的思考力をみる問題においては伸びがみられている。（全国学力学習状況調査結果H29・30・31年度データ比較）

○教師：論理的な思考力の育成に向けた授業改善において、各学年の児童の実態に応じた教科選択（1・3・4・6学年：国語、2学年：生活科、5学年：算数）と、学校教育目標・目指す児童像を明記した指導案の活用や単元配列表の作成・活用で、学校全体で共通理解・共通実践が図れた。

◆全学年で柱にする教科を絞り、学習内容や手立てを学年間で共有し、評価・改善の視点を明確にすることで、次の教育活動につながりができ、より効率的に取り組めるのではないかな。

②B 中学校（教科・領域のカリキュラム・マネジメントタイプ）

【カリキュラム・マネジメントの視点】PDCAサイクル、人的・物的資源の活用

【担当・取り組みの主体】各学年の数学担当

【身に付けさせたい資質・能力】自己肯定感、数学の知識及び技能、思考力・判断力・表現力等

新たな課題を解決する際に、掲示してある既習事項の中から必要な知識・技能を生徒自身が選び活用して解決できる場の設定。生徒の考えを認め価値づける承認行動を数学科で実践しながら、資質・能力の育成に向け取り組んだ。

○生徒：質問したり、教えてあげたりと休み時間も学び合う姿が多く見られるようになった。

（授業観察記録）

○教師：生徒の自己肯定感を高めるための承認行動を意識した授業づくりに向け、本総合教育センター、B 中学校との共同研究で内外の人的・物的資源の側面から効率的に授業改善を重ねることができた。

◆数学科で実践した自己肯定感を高めるための承認行動を意識した授業づくりを、学年で共有し、各教科の特性を生かしながら実践を図ることで、学習効果の最大化が図れるのではないかな。

③C 中学校（授業、教科・領域のカリキュラム・マネジメントタイプ）

【カリキュラム・マネジメントの視点】P D C A サイクル、人的・物的資源の活用

【担当・取り組みの主体】教頭（数学）

【身に付けさせたい資質・能力】論理的思考力

中高一貫校という特色を生かした授業づくりを通して、論理的思考力の育成を図った。中学校数学の授業づくりの視点として、小学校の学びを生かし、高校での学びに向けたつながりを意識した授業づくりで、教頭が数学の授業提案を行い、数学科だけでなく、他教科の教諭や他校種の教諭も授業参観し中高の連携を行う。

○生徒：体験的、操作的活動と他者との交流を通して、発展的な問題解決を図ることができるようになっていく。（評価問題・ノート記述）

○教師：中高の教師で授業研究会を行い、教科だけでなく校種のつながりを大切にした実践を行うことができた。

◆中高一貫校という実態を生かし、教科や校種の枠を超えた授業研究を行い、中高一貫を強みとした実践を重ねることで、学校教育目標・目指す生徒像の長期的視点に立った育成ができるのではないかと。

④D 高等学校（生徒、学級、学年、学校のカリキュラム・マネジメントタイプ）

【カリキュラム・マネジメントの視点】P D C A サイクル、人的・物的資源の活用

【担当・取り組みの主体】生徒、担任、学年主任、生徒指導主任、教頭、校長

【身に付けさせたい資質・能力】確かな学力、豊かな人間性、創造性の育成

生徒に、「意欲調査」と「高校生活チェックシート」を実施し、自分の学校生活を振り返り、実態把握と改善策を考える機会を持つことで、学校生活に意欲的に取り組むことへつなげていった。また生徒指導の機能状態を測り、生徒との関わり方や指導の方法を見直して足並みを揃えるために「職員調査」を実施した。校内研修で、生徒の思いを受け止めながら、職員全員で目的と手立ての共有を図る研修を重ねた。

○生徒：自分の学校生活を見直し、課題の改善を行う生徒が増えた。

（「生徒の意欲調査」「生活チェックシート」）

○教師：生徒の実態把握から生徒の思いや課題に寄り添う関わり方を意識するようになった。

また、校内研修を通してデータを活用した手立ての共有が図れ、組織的に生徒理解と確かな学力の向上に向けた環境づくりが図れてきた。

◆今年度は生徒の実態把握と生徒の思いに寄り添う支援や関わり方の共有が図れた。次年度も、確かな学力、豊かな人間性、創造性の育成に向け、今年度の取り組みを継続することでより効果が期待できるのではないかと。

⑤E 高等学校（学校のカリキュラム・マネジメントタイプ）

【カリキュラム・マネジメントの視点】P D C A サイクル、人的・物的資源の活用

【担当・取り組みの主体】生徒、教諭、校長

【身に付けさせたい資質・能力】学校行事の運営を、生徒主体で行うことで、「自治の力」を身に付けさせる。それによって、学校の教育目標を達成できるようにする。

体育祭、文化祭の2年間の行事に向けた取り組みでは、学校長がカリキュラム・マネジメントの視点を持ち、「自治の力」を身に付けさせたいという明確なビジョンを示したことで、「何をするのか」「どう取り組むのか」を生徒と共有し生徒主体の取り組みを行った。企画・立案・運営・総括を生徒自身で行うことで生徒の主体的な姿や「自治の力」が伸張していった。

○生徒：映像記録を基に、昨年度の行事の振り返り、生徒間で他校の取り組みから新たな視点を得て、企画・立案・運営・総括を議論・検討・吟味し合意形成のもと行事を行うことができた。（映像記録・観察、ワークシート記述より）

○学校：校長のリーダーシップのもと、学校行事のねらいを教師や生徒と共有することで、生徒自身が何のために行事を行うのか、どのような方法が良いのかを考え、取り組むことにつなげることができた。

◆体育祭、文化祭の実施が2年に1度のローテーションであることを生かし、企画から運営・総括までの取り組みの良さや改善策を検討し、行事の取り組みを深めていく。また、生徒の主体的活動の継続を図ることで、「自治の力」をさらに高め、日々の活動や次の行事につなげて行くことができるのではないかと。

⑥F 商業高等学校（生徒、教科・領域のカリキュラム・マネジメントタイプ）

【カリキュラム・マネジメントの視点】教科等横断的な視点、PDCAサイクル、人的・物的資源の活用

【担当・取り組みの主体】生徒、教科担当者、学科

【身に付けさせたい資質・能力】自分の強みを知り、何事にも前向きに、学び続けていく姿勢
生徒自らが考えた台湾研修旅行プラン「F 商 B&S プラン」づくりに向け、情報の収集 I（R）自主研修プランの作成（P）を行い、実施（D）・評価（C）・事後学習（A）のPDCAサイクルを学習の流れとし、生徒主体となり取り組むことで、自分の強みを知り、何事にも前向きに、学び続けていく姿勢の育成を図っている。また、学校教育目標や目指す生徒像の育成に向け、ワークショップを取り入れた参加型の職員研修（カリキュラム・マネジメントの視点研修）を行い、目的と手立ての共有を図る。

○生徒：生徒自らが考えた台湾研修旅行プラン「F 商 B&S プラン」づくりや現地での自主研修を通して、自分の良さを生かし、主体的に学ぶことができた。

（パネルディスカッションの様子、「F 商 B&S プラン」、事前・事後振り返り記述）

○教師：カリキュラム・マネジメントの視点を意識することで、生徒の学びを次の学びへつなぐ意識共有を学科で行うことができた。

◆今年度からの取り組みである海外研修旅行（台湾）の取り組みを次年度に生かし、生徒自身が学びを企画し取り組んでいける活動の充実に向け、職員研修を重ね学校の組織力の向上がさらに図れるといいのではないかと。

⑦G 特別支援学校（授業、学校のカリキュラム・マネジメントタイプ）

【カリキュラム・マネジメントの視点】教科等横断的な視点、PDCAサイクル、人的・物的資源の活用

【担当・取り組みの主体】授業担当者、研究主任、教務主任、教頭、校長

【身に付けさせたい資質・能力】生徒一人一人が特性等を最大限に発揮し、将来の職業的・社会的自立を図り、働く喜びと誇りをもち自他ともに敬愛する心豊かな人間の育成を目指す。

外部講師によるワーキングメモリの校内研修を始め、授業のUD化チェックシート、ワークショップ等を実施し、全職員で生徒の実態把握と支援方法、授業の目的と評価規準の見直し等の共有を行った。また、近隣の公民館や自治会と連携し、制作物販売や緑化活動等生徒の学びの場や地域貢献の機会を通して、将来の職業的社会的自立と働く喜びと誇りの育成を図った。

○生徒・教師：生徒一人一人の強みと弱みを把握する「実行機能アンケート（複雑な課題の遂行に際して、思考や行動を制御する認知テスト）」の結果を生かした支援やワーキングメモリを考慮した授業改善を行うことができた。

◆生徒一人一人の特性を最大限に発揮させ、将来の社会的自立につながる教育活動に向けた「実行機能アンケート」の活用継続で、教科等横断的な視点、PDCAサイクルの視点を取り入れた授業づくりと、地域と連携を意識した人的・物的資源の活用の継続を図れるのではないかと。

2 展望

本総合教育センターの2年間に及ぶプロジェクト研究において再確認できたことは、各学校が主体となって、学校教育目標の実現に向け、学校の教育活動と経営活動の全体を工夫・改善している姿であった。全職員で、目の前の児童生徒の実態を共有し、学校教育目標を実現するにはどのような工夫・改善が有効なのか、児童生徒一人一人の良さをさらに伸ばし、成長につなげるにはどのような手立てが必要かを常に意識することで、学校教育活動の質の向上を図り続けることができる。これら教育活動そのものがカリキュラム・マネジメントの目的であり、すでに各学校においてもこれまでに実践されてきたことである。カリキュラム・マネジメントの視点は、各学校において、児童生徒、職員、家庭や地域それぞれが主体となって学校教育目標・目指す児童生徒像の実現に向け、目的や手立てをさらに意識したり、意図的に共有したりすることである。

本報告書、リーフレット、ハンドブックが、昨年度調査研究で明らかとなった現状と課題の改善につながり、各学校の教育活動をさらに効果的なものにするツールとして活用が図られることで、目の前の児童生徒が迎えるこれからの時代に必要な資質・能力の育成の一助となることを期待して本報告のまとめとする。

〈参考文献〉

- 高橋 正尚 2019 『成功事例に学ぶ カリキュラム・マネジメントの進め方』 教育開発研究所
- 村川 雅弘 2018 『1章 カリキュラム・マネジメントの基礎的・基本的な処方 22』 村川雅弘編集『学力向上・授業改善・学校改革 カリマネ 100 の処方箋』 教育開発研究所
- 山崎 保寿 2018 『「社会に開かれた教育課程」のカリキュラム・マネジメント』 学事出版
- 大杉 住子 2017 『次期学習指導要領の理解を深めるための9つの視点』『VIEW21 4月号 Vol.1 高校版』ベネッセ教育総合研究所
- 奈須 正裕 2017 『「資質・能力」と学びのメカニズム』 東洋館出版社
- 吉富 芳正 2017 『第1章 学校における教育課程の意義』 天笠茂編者「平成29年改訂 中学校教育課程実践講座 総則」 ぎょうせい
- 天笠 茂 2016 『新教育課程を生かすカリキュラム・マネジメント⑤』『新教育課程ライブラリ Vol.5』 ぎょうせい
- 教育調査研究所 2016 研究紀要第96号『小中学校における「カリキュラム・マネジメント」の現状と今後の課題』
- 田村 知子 2016 『“カリマネ”で学校をチーム化し、教育目標のよりよい達成を目指す』『VIEW21 8月号 Vol.3 高校版』ベネッセ教育総合研究所
- 田村 知子 2016 『チーム学校によるカリキュラム・マネジメント』 加藤崇英編者『「チーム学校」まるわかりガイドブック』 教育開発研究所
- 田村 知子 2016 『カリキュラムマネジメント入門』「月刊 高校教育 2016/May」学事出版
- 田村 知子 2016 「教科等横断的な視点によるカリキュラム編成」『「チーム学校」が支えるカリキュラムマネジメント』田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編者「カリキュラムマネジメントハンドブック」 ぎょうせい
- 村川 雅弘 2016 「カリキュラムマネジメントの理解を深める研修の開発」田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編者『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』 ぎょうせい
- 吉富 芳正 2016 『資質・能力の育成を実現するカリキュラム・マネジメント』田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編者「カリキュラムマネジメント・ハンドブック」 ぎょうせい
- 田村 知子 2013 『カリキュラム・マネジメントの手順と手法』 村川雅弘・野口徹・田村知子・西留安雄編者『「カリマネ」で学校はここまで変わる!』 ぎょうせい
- 田村 知子 2011 『カリキュラム・マネジメントの実践方法』 田村知子編者「実践・カリキュラムマネジメント」 ぎょうせい
- 沖縄県立総合教育センター 2018 『これからの時代に必要となる資質・能力の育成～カリキュラム・マネジメントの視点を通して～（1年次）』
- 島根県教育センター 2018 『授業改善に向けた教育センターの支援の在り方（2年次）「授業づくりの研修」の効果を上げる「授業づくりの研修ハンドブック」の作成』
- 広島市教育センター 2017 『校内授業研究における子どもの見取りを基にした「授業研究の効力感」を導く研究（2年次）学校研究主題を具体的に示したルーブリックの作成・活用を通して』

〈参考 URL〉

- 文部科学省 中央教育審議会答申（平成28年12月）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm (2018年7月アクセス)
- 赤沢早人 2012 『「いい学校」の創り方 改訂版』
http://souken.shingakunet.com/career_g/2016/12/2016_cg415_d101.pdf (2018年11月アクセス)
- 文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター 学習評価の在り方ハンドブック（令和元年6月）
<http://www.mext.go.jp/kaihatsu/zenkokugankuryoku.html> (2019年7月アクセス)

〈参考 WEB サイト〉

- 文部科学省中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/（最終閲覧：2019年10月）

カリキュラム・マネジメント ガイド

令和元年

沖縄県立総合教育センター

これまでの取り組みを生かし、児童生徒の輝きにつなげる

カリキュラム・マネジメント ガイド

わかった！



できそう！



なっとく！

これからの学校教育

予測困難な時代の中でも、児童生徒一人一人が社会の変化に主体的に向き合
って、多様な他者と協働しながら、よりよい社会の形成者として自己実現を図っ
ていけるような資質・能力を育むことが求められています。

そのため、学習指導要領総則においても、児童生徒の様々な**学びのつながり**を
意識し、共有しながら、組織的かつ計画的に教育活動の質を高め、**学習効果の最
大化**を図るカリキュラム・マネジメントが明記されました。

沖縄県立総合教育センター

沖縄県沖縄市与儀 3丁目11番1号

TEL: (098) 933-7555 FAX: (098) 933-3233

カリキュラム・マネジメントの三つの側面を意識して
教育効果の最大化を図り、学校教育目標を実現する



学校長のリーダーシップが鍵！
我が校のビジョンを明確に示し
全職員で共有 全職員で実践！

学校教育目標（目指す児童生徒像）の実現

側面 1

教科等横断的な視点

各学校で育てたい資
質・能力を明確にし、教
師が連携。複数の教科
等での学びを関連付け
ながら育てたい資質・能
力を育む授業をつくる。

側面 2

PDCA サイクル

校内研修や学年会、教
科会等で教育課程や指導
方法等を児童生徒の学び
の状況をもとに可視化、共
有化。全職員で評価し、改
善へつなぐサイクルを回し
続ける。

側面 3

人的・物的資源の活用

教育資源の効果的な
活用と地域連携で、豊か
な学び、深い学びのある
学校教育を構築する。

Q & A



Q1: これまでの取り組みの振り返りをどのように行えばよいのですか？

2つの視点で振り返ってみましょう。

- ①何のための取り組みであったのか、目的の再確認。
- ②指導計画は効果的であったか、目的と手立てを児童生徒の姿から振り返る。

例えば、教科の年間指導計画が教科書の内容の配列だけで決められていなかったかの視点で見直し、他教科や行事等と関連させながら、さらに、効果的な学びにつなげることができないか確認してみましょう。



Q2: 「教科等横断的な視点に立った資質・能力」にはどのようなものがありますか？

学習指導要領総則では、「学習の基盤となる資質・能力」と「現代的な諸課題に対して求められる資質・能力」の2つが示されています。前者の例として、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等、後者の例として、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力、自然環境や資源の有限性等の中で持続可能な社会をつくる力等があります。

また、「教科の枠組みを踏まえた資質・能力」として、伝統的な教科等の枠組みを踏まえながら社会の中で活用できる力等が学習指導要領総則解説編に明示されました。



Q3: 先生方それぞれのキャリアステージに応じたカリキュラム・マネジメントの関わり方

学校教育目標の実現に向けて、全ての教職員が自分事として役割を果たしていくからこそ、効果的に教育活動の質を高めていくことができます。

沖縄県は5段階でキャリアステージが示されています。学校の実態と照らし合わせながら各役割を相談していくといいですね。



実践事例と6つのカリキュラム・マネジメントタイプ

これまでの教育活動を6つのカリキュラム・マネジメントタイプを意識した視点で見直し、教育活動の質の向上を図る！

6つのカリキュラム・マネジメントタイプ表 (2018 沖縄県立総合教育センター)

カリキュラム・マネジメントタイプ	内 容	担当・取り組みの主体
児童生徒の カリキュラム・マネジメントタイプ	自己の学びに関すること	児童生徒自身
授業の カリキュラム・マネジメントタイプ	個々の授業づくり 担当者の授業づくりや単元計画に関する工夫改善	授業担当者
教科・領域の カリキュラム・マネジメントタイプ	各教科の授業づくり 各教科における授業づくりや単元計画に関する工夫改善	各教科主任
学級の カリキュラム・マネジメントタイプ	学級経営 学級の児童生徒の実態を踏まえた学級づくりの工夫改善	担任
学年の カリキュラム・マネジメントタイプ	学年経営 担当学年の児童生徒の実態を踏まえた学年経営 の工夫改善、学年集団としての基本方針、実践、見直し等	学年主任
学校の カリキュラム・マネジメントタイプ	学校経営 学校経営全体計画、グランドデザイン、学校教育 目標の具体化・共有化、校内研究テーマの推進等	教務・研究・学推 主任、教頭、校長

うるま市立 A 小学校

授業、教科・領域、学年、学校 のカリキュラム・マネジメント タイプ

1年間のながれ 【側面2】 PDCAサイクルの視点

【身に付けさせたい資質・能力】 論理的思考力



学校長の一言！

学校組織力向上の視点が鍵！
共通実践、成果・課題・課題
解決策を全職員で共有！



6学年主任の一言！

児童の学びや育ちの視点が授業
改善、評価へつながる！児童の学
びの変容を丁寧にみとることを学
年で共有！



2学年担任の一言！

自己肯定感を高める視点が重要！
既習を活用する場を意図的・計画的に
教育活動に盛り込み、児童一人一人に
成功体験を積み重ねていくことが大切！



教科・領域 のカリキュラム・マネジメント タイプ

沖縄市立 B 中学校

【身に付けさせたい資質・能力】

自己肯定感、数学の知識及び
技能、思考力、判断力、表現力等



【側面3】 人的・物的資源の活用

生徒の自己肯定感を高めるための承認行動を意識した
授業づくりを外部の人材を活用しながら数学科で実践。

授業、教科・領域 のカリキュラム・マネジメント タイプ

県立 C 中学校

【身に付けさせたい資質・能力】

論理的思考力



【側面3】 人的・物的資源の活用

教科等横断的な視点での授業づくりを数学の研究授業を通して、
中・高教諭で共有。中高一貫校の特性を生かした実践。

生徒、学級、学年、学校 のカリキュラム・マネジメントタイプ

県立 D 高等学校

【身に付けさせたい資質・能力】

自身の行動への適切な判断力(自己指導力)の育成と学習や諸活
動への取り組みに対する意欲向上

【側面2】 PDCAサイクルの視点

「意欲調査」「高校生活チェッ
クシート」を実施し、学校生活
を振り返り、自身の生活を見直
す評価・改善を重ねた実践。



学校 のカリキュラム・マネジメント タイプ

県立 E 高等学校

【身に付けさせたい資質・能力】

学校行事の運営を、生徒主体で行うことで、「自治の力」を育成する。
それによって、学校教育目標を達成できるようにする。

【側面2】 PDCAサイクル の視点

学校の努力目標である自主性・
主体性の育成へ向けた話し合いを
生徒達で行い、新しい行事づくり
に取り組んだ実践。



生徒、教科・領域 のカリキュラム・マネジメント タイプ

県立 F 商業高等学校

【身に付けさせたい資質・能力】

自分の強みを知り、何事にも前向きに、学び続けていく姿勢

【側面2】 PDCA サイクル

台湾のオープンデータから情報
を収集し、各自が設定したテーマ
(衣・食・住・環境・文化・政治・経済
等)ごとに内容をまとめ、パネルテ
ィスカッションを行い、知識の共有
と表現技法を学び合う、評価・改善を意識した実践。



授業、学校 のカリキュラム・マネジメント タイプ

県立 G 特別支援学校

【身に付けさせたい資質・能力】

生徒一人一人が特性等を最大限に発揮し、将来の職業的・社会的自
立を図り、働く喜びと誇りを持ち他とともに敬愛する心豊かな人間育
成を目指す。

【側面2】 PDCAサイクル

全生徒の「実行機能」アンケート調査
と結果の共有化。全職員による授業の
UD 化チェックのワークショップの実施で
実態把握と支援方法を共有した実践。



詳細は、沖縄県立総合教育センターHP
ハンドブック

「カリキュラム・マネジメントのポイントと実践事例の紹介」 をご覧下さい



つくってみよう！「単元配列表」

「単元配列表」は、各学校が学校教育目標、目指す児童生徒像の育成に向け、何を、いつ、どのように学ぶかを可視化・共有化することができ、共通実践に有効です。学習のねらいや学習内容、学習活動の重なりも教材研究の視野に入れ、意図的に繰り返したり精選したりしながら、つないだ資質・能力（学校教育目標や目指す児童生徒像、育成を目指す資質・能力）を高めていくことが大切です。

「単元配列表」の作成手順

ステップ 1

教科等横断的につなぐ観点(育成を目指す資質・能力)を明らかにする。

※諸調査の結果を活用

ステップ 2

つなく観点から学習のねらいや内容をとらえ直し、いつ、何をどのように学ぶかを学年・教科会等で話し合い、柱にする教科や行事を決める。このとき、つながりが可視化できるよう単元を枠で囲むと共有しやすい。

ステップ 3

活用例として、単元導入時は、作成した「単元配列表」をもとに、学年・教科会で、つないだ観点や学習のねらい・内容・方法等を共有、実践する。また、単元終了時は、「単元配列表」をもとに振り返りを行い、評価・改善を重ねていく。

つなぐ観点 (育成を目指す資質・能力)

学習の基盤となる資質・能力

- 言語能力 ○情報活用能力
○問題発見・解決能力
○論理的思考力 など

**現代的な諸課題に対して求められる
資質・能力**

- キャリア教育 ○環境教育
○食育 ○安全教育 など

学習方法

- 言語活動 ○問題解決学習 など

教科の枠組みを踏まえた資質・能力

例1 年間指導計画表を活用した「単元配列表」(第1学年)国語科を柱に論理的思考力を育成

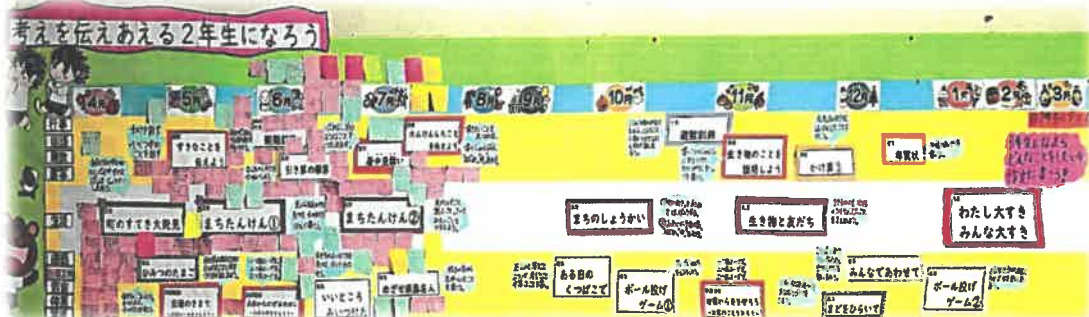
[illegible]

← 例1 年間指導計画表を活用した「単元配列表」。学年間での共有や次年度の引き継ぎに活用。

↓ 例2 学年掲示板に掲示した「単元配列表」。単元の導入時に児童とねらいを共有。
単元終了時には「何ができるようになったか」をふせん紙に記入し、学年全体で成果を共有。学びを次につなげる視点で活用。



1学期終了時に振り返りを行
っている様子



例2 学年掲示板に掲示した「単元配列表」 縦1.5m 横3m (第2学年)生活科を柱に論理的思考力を育成

やってみよう！指導案で 育成を目指す資質・能力を意識した授業の共有

学校教育目標（目指す児童生徒像）の具現化や育成を目指す資質・能力を意識した教育活動が、各学校において行われています。全職員がお互いの授業や教育活動をつなぐ視点ともいえる学校教育目標や育成を目指す資質・能力を指導案に明記することで、意識化・共有化を図ることができ、計画的・組織的な取り組みにつなげることができます。各教科での授業や教育活動は、1. 単元や学習のねらい、2. 学校教育目標や育成を目指す資質・能力の2つの視点でつくることが意識することが重要です。

学校教育目標（目指す児童生徒像）や育成を目指す資質・能力を明記した指導案の例

うるま市立 小学校（案）
第○学年 ○○科学習指導案
令和元年 月 日（ ） 校時
年 組 名 授業者
共同研究考

1 単元名 「 」 (年時 / 時間)

2 単元の目標
① ～できる。 [知識及び技能]
② ～できる。 [思考力、判断力、表現力等]
③ ～しようとしている。 [学びに向かう力、人間性等]

3 単元について
(1) 教材観
(2) 見解観（単元内容に関する観点から）

4 校内研究とのつながり
(1) テーマとのつながり

場面	児童の活動	児童の様子と評価
① 導入		
② 展開		
③ まとめ		

(2) 育成を目指す資質・能力について（目指す児童生徒像、校内研究等）
(3) 指導観（単元内容、育成を促す資質・能力の観点から）

5 本校の学校教育目標以下目指す児童像

本校の学校教育目標	目指す児童像
よく考え、よく考え、よく考える子（3C）	① 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ② 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ③ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ④ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ⑤ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ⑥ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ⑦ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ⑧ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ⑨ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ⑩ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ⑪ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ⑫ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ⑬ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ⑭ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ⑮ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ⑯ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ⑰ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ⑱ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ⑲ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ⑳ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㉑ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㉒ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㉓ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㉔ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㉕ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㉖ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㉗ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㉘ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㉙ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㉚ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㉛ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㉜ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㉝ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㉞ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㉟ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㊱ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㊲ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㊳ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㊴ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㊵ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㊶ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㊷ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㊸ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㊹ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㊺ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㊻ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㊼ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㊽ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㊾ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C） ㊿ 自ら考え、自ら考え、自ら考える子（3C）

6 単元で育みたい資質・能力の評価

評価項目	評価方法	評価結果
知識・技能	① 知識・技能	① 知識・技能
思考力・判断力・表現力	② 思考力・判断力・表現力	② 思考力・判断力・表現力
学びに向かう力・人間性等	③ 学びに向かう力・人間性等	③ 学びに向かう力・人間性等

7 本単元の評価（学習単元の評価）

評価項目	評価方法	評価結果
知識・技能	① 知識・技能	① 知識・技能
思考力・判断力・表現力	② 思考力・判断力・表現力	② 思考力・判断力・表現力
学びに向かう力・人間性等	③ 学びに向かう力・人間性等	③ 学びに向かう力・人間性等

校内研究とのつながりや本単元で育みたい資質・能力（今年度、重点を置く目指す児童生徒像）を指導案に明記します。単元や学習の評価だけでなく、本単元で育成を目指す資質・能力の評価規準等を作成し、学年や教科の枠を超えて児童生徒の学びの過程や成果を丁寧にみとり、学びを次に生かす評価にすることが大切です。

学校教育目標・目指す児童像を明記し、本単元で育成を意識する

本単元で育成を目指す資質・能力を明記。学校や児童生徒の実態に応じて評価基準（ABC）を作成（B規準の表記でもよい）

学校教育目標・目指す児童生徒像を本時の授業のどの場面でもとるかを明記することで、意識化と共有化を図る

本単元のねらいに準拠した観点別評価

本単元で育成を目指す資質・能力をどの場面で、どの方法で評価するかを明記することで、ねらいに迫れる授業計画をたてることにつながります。

作成した評価規準をもとに座席表を活用し、学びの過程を丁寧にみとる

指導案の型（Word）は、沖縄県立総合教育センターHPにてダウンロードできます。

例

8 単元計画（1）単元のながれ

単元計画	ねらい・学習活動	評価規準・評価方法
1 導入	① 導入	知① ノート分析
2 展開	② 展開	知② ノート分析
3 展開	③ 展開	知③ ノート分析
4 展開	④ 展開	知④ ノート分析
5 展開	⑤ 展開	知⑤ ノート分析
6 展開	⑥ 展開	知⑥ ノート分析
7 展開	⑦ 展開	知⑦ ノート分析
8 展開	⑧ 展開	知⑧ ノート分析
9 展開	⑨ 展開	知⑨ ノート分析
10 展開	⑩ 展開	知⑩ ノート分析
11 展開	⑪ 展開	知⑪ ノート分析
12 展開	⑫ 展開	知⑫ ノート分析
13 展開	⑬ 展開	知⑬ ノート分析
14 展開	⑭ 展開	知⑭ ノート分析
15 展開	⑮ 展開	知⑮ ノート分析
16 展開	⑯ 展開	知⑯ ノート分析
17 展開	⑰ 展開	知⑰ ノート分析
18 展開	⑱ 展開	知⑱ ノート分析
19 展開	⑲ 展開	知⑲ ノート分析
20 展開	⑳ 展開	知⑳ ノート分析
21 展開	㉑ 展開	知㉑ ノート分析
22 展開	㉒ 展開	知㉒ ノート分析
23 展開	㉓ 展開	知㉓ ノート分析
24 展開	㉔ 展開	知㉔ ノート分析
25 展開	㉕ 展開	知㉕ ノート分析
26 展開	㉖ 展開	知㉖ ノート分析
27 展開	㉗ 展開	知㉗ ノート分析
28 展開	㉘ 展開	知㉘ ノート分析
29 展開	㉙ 展開	知㉙ ノート分析
30 展開	㉚ 展開	知㉚ ノート分析
31 展開	㉛ 展開	知㉛ ノート分析
32 展開	㉜ 展開	知㉜ ノート分析
33 展開	㉝ 展開	知㉝ ノート分析
34 展開	㉞ 展開	知㉞ ノート分析
35 展開	㉟ 展開	知㉟ ノート分析
36 展開	㊱ 展開	知㊱ ノート分析
37 展開	㊲ 展開	知㊲ ノート分析
38 展開	㊳ 展開	知㊳ ノート分析
39 展開	㊴ 展開	知㊴ ノート分析
40 展開	㊵ 展開	知㊵ ノート分析
41 展開	㊶ 展開	知㊶ ノート分析
42 展開	㊷ 展開	知㊷ ノート分析
43 展開	㊸ 展開	知㊸ ノート分析
44 展開	㊹ 展開	知㊹ ノート分析
45 展開	㊺ 展開	知㊺ ノート分析
46 展開	㊻ 展開	知㊻ ノート分析
47 展開	㊼ 展開	知㊼ ノート分析
48 展開	㊽ 展開	知㊽ ノート分析
49 展開	㊾ 展開	知㊾ ノート分析
50 展開	㊿ 展開	知㊿ ノート分析

9 授業計画

授業計画	ねらい・学習活動	評価規準・評価方法
1 導入	① 導入	知① ノート分析
2 展開	② 展開	知② ノート分析
3 展開	③ 展開	知③ ノート分析
4 展開	④ 展開	知④ ノート分析
5 展開	⑤ 展開	知⑤ ノート分析
6 展開	⑥ 展開	知⑥ ノート分析
7 展開	⑦ 展開	知⑦ ノート分析
8 展開	⑧ 展開	知⑧ ノート分析
9 展開	⑨ 展開	知⑨ ノート分析
10 展開	⑩ 展開	知⑩ ノート分析
11 展開	⑪ 展開	知⑪ ノート分析
12 展開	⑫ 展開	知⑫ ノート分析
13 展開	⑬ 展開	知⑬ ノート分析
14 展開	⑭ 展開	知⑭ ノート分析
15 展開	⑮ 展開	知⑮ ノート分析
16 展開	⑯ 展開	知⑯ ノート分析
17 展開	⑰ 展開	知⑰ ノート分析
18 展開	⑱ 展開	知⑱ ノート分析
19 展開	⑲ 展開	知⑲ ノート分析
20 展開	⑳ 展開	知⑳ ノート分析
21 展開	㉑ 展開	知㉑ ノート分析
22 展開	㉒ 展開	知㉒ ノート分析
23 展開	㉓ 展開	知㉓ ノート分析
24 展開	㉔ 展開	知㉔ ノート分析
25 展開	㉕ 展開	知㉕ ノート分析
26 展開	㉖ 展開	知㉖ ノート分析
27 展開	㉗ 展開	知㉗ ノート分析
28 展開	㉘ 展開	知㉘ ノート分析
29 展開	㉙ 展開	知㉙ ノート分析
30 展開	㉚ 展開	知㉚ ノート分析
31 展開	㉛ 展開	知㉛ ノート分析
32 展開	㉜ 展開	知㉜ ノート分析
33 展開	㉝ 展開	知㉝ ノート分析
34 展開	㉞ 展開	知㉞ ノート分析
35 展開	㉟ 展開	知㉟ ノート分析
36 展開	㊱ 展開	知㊱ ノート分析
37 展開	㊲ 展開	知㊲ ノート分析
38 展開	㊳ 展開	知㊳ ノート分析
39 展開	㊴ 展開	知㊴ ノート分析
40 展開	㊵ 展開	知㊵ ノート分析
41 展開	㊶ 展開	知㊶ ノート分析
42 展開	㊷ 展開	知㊷ ノート分析
43 展開	㊸ 展開	知㊸ ノート分析
44 展開	㊹ 展開	知㊹ ノート分析
45 展開	㊺ 展開	知㊺ ノート分析
46 展開	㊻ 展開	知㊻ ノート分析
47 展開	㊼ 展開	知㊼ ノート分析
48 展開	㊽ 展開	知㊽ ノート分析
49 展開	㊾ 展開	知㊾ ノート分析
50 展開	㊿ 展開	知㊿ ノート分析

10 座席表：授業時の机内指導で活用 【6の評価（本単元で育みたい資質・能力）用：A・B・C】

座席表	評価規準・評価方法
A	知① ノート分析
B	知② ノート分析
C	知③ ノート分析

チェックリスト

次のチェックリストを使って、自身の取り組みを確認してみましょう。

(4 とても当てはまる 3 だいたい当てはまる 2 あまり当てはまらない 1 全く当てはまらない)

管
理
職

1 的教 な科 視等 点横 断	①	学校教育目標（目指す児童生徒像）を意識した教育課程になっている。	4	3	2	1
	②	各教科の指導内容が、児童生徒の中でつながるよう教科間の関連や関係が意識して指導されている。	4	3	2	1
	③	学校教育目標を意識した学習のねらいや学習内容、学習活動の精選、繰り返し深める校内研修等を実施している。	4	3	2	1
2 P D サ C イ A ク ル	④	日々の授業で児童生徒の学習状況を評価し、主体的・対話的で深い学びの視点での授業改善を進めている。	4	3	2	1
	⑤	校内研修（研究授業、授業研究会）の成果や課題、改善策、外部研修会等で学んだことを学校経営につなげている。	4	3	2	1
	⑥	学校経営の検証軸として、評価指標（ループリック）等を作成している。	4	3	2	1
	⑦	国・県の施策や調査、学校評価等を活用して評価を行い、次年度へつなげている。	4	3	2	1
3 資人 源的 の・ 活物 用的	⑧	地域施設や自然環境、地域人材等の外的資源を組織的・計画的に活用し、教育活動の質の向上を図っている。	4	3	2	1
	⑨	重点目標の実現を目指した地域・保護者との連携を図りながら、学校経営を進めている。	4	3	2	1
	⑩	職員同士の活発なコミュニケーションが可能な職場環境づくりを心がけている。	4	3	2	1

教
職
員
等

1 的教 な科 視等 点横 断	①	所属校は、学校教育目標（目指す児童生徒像）を意識した教育課程になっている。	4	3	2	1
	②	各教科の指導内容が、児童生徒の中でつながるよう教科間の関連や関係を意識して指導している。	4	3	2	1
	③	学校教育目標を意識した学習のねらいや学習内容、学習活動の精選、繰り返し深める学習指導を行っている。	4	3	2	1
2 P D サ C イ A ク ル	④	日々の授業で児童生徒の学習状況を評価し、主体的・対話的で深い学びの視点での授業改善を行っている。	4	3	2	1
	⑤	校内研修（研究授業、授業研究会）の成果や課題、改善策、外部研修会等で学んだことを日々の授業づくりにつなげている。	4	3	2	1
	⑥	授業や学級経営の検証軸として、評価指標（ループリック）等を作成している。	4	3	2	1
	⑦	学校教育目標や学校評価等を活用して自身の授業実践等の評価を行い、次年度へつなげている。	4	3	2	1
3 資人 源的 の・ 活物 用的	⑧	地域施設や自然環境、地域人材等の外的資源を組織的・計画的に活用し、授業実践にとり入れている。	4	3	2	1
	⑨	学校生活や学習状況について、地域や保護者と連携を図りながら教育活動を進めている。	4	3	2	1
	⑩	一人で考え込まず、他の職員と協働しながら教科指導、学級経営等を進めている。	4	3	2	1

☆チェック結果を活用して、良さをさらに伸ばす視点、課題を改善する視点で、児童生徒をみんなで育もう！

ハンドブック

「カリキュラム・マネジメントのポイントと実践事例の紹介」

ハンドブック

「カリキュラム・マネジメントのポイントと実践事例の紹介」



作成中 令和元年 12月現在

(令和2年3月 完成予定)

沖縄県立総合教育センター

目次

はじめに	P
～これからの時代に必要となる資質・能力とカリキュラム・マネジメント～	あとで挿入

第Ⅰ章 理論編

1	カリキュラム・マネジメントとは	
2	カリキュラム・マネジメントの三つの側面	
3	カリキュラム・マネジメントの6つのタイプ	
4	カリキュラム・マネジメントに取り組む際の5つの視点	

第Ⅱ章 実践編

1	理論編を踏まえた実践事例の見方や活用の仕方	
2	実践事例の紹介	
実践事例 1	うるま市立 A 小学校	「自分の考えを持ち、説明できる児童の育成」 ～教科等横断的な視点を取り入れた対話的な学習活動を通して～
実践事例 2	沖縄市立 B 中学校	「基礎的・基本的な学力の向上と主体的に学び合う力の育成」 ～授業改善と自己肯定感を高める取り組みを通して～
実践事例 3	県立 C 中学校	「論理的思考力の育成」 ～体験的、操作的な活動を取り入れた授業を通して～
実践事例 4	県立 D 高等学校	「生徒指導のカリキュラム・マネジメントから目指す学校教育目標実現への取り組み」 ～アンケート調査を活用したPDCAサイクルを通して～
実践事例 5	県立 E 高等学校	「『自治の力』を身につける、学校教育全体をつなげるカリキュラム・マネジメント」 ～生徒主体の学校行事を創り上げる取り組みを通して～
実践事例 6	県立 F 商業高等学校	「カリキュラム・マネジメントを軸とした学校教育目標実現へ向けた取り組み」 ～海外研修旅行における自主研修プランづくりを通して～
実践事例 7	県立 G 特別支援学校	「『実行機能アンケート』を活用した授業改善のカリキュラム・マネジメント」 ～軽度知的障害のある生徒が主体的に取り組む力を育成するための研究を通して～

第Ⅲ章 Q&A 編

第Ⅳ章 資料編（検討中）

1	ワークシート	2	その他（成果物など）
---	--------	---	------------

参考資料	
------	--

はじめに

～これからの時代に必要となる資質・能力とカリキュラム・マネジメント～

今後、グローバル化の進展や技術革新等により、社会は急速に変化し、予測が困難な時代となると考えられています。このような時代を生きる子供たちには、様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働しながら課題を解決し、新たな価値を創造する力など、これからの人生を主体的に切り拓く力を身に付けることが求められています。

新しい学習指導要領では、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという理念のもと、社会と連携・協働しながら、これからの時代に必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現が示されています。

平成28年12月の中央教育審議会答申（以下「答申」）には、その実現の課題として、「教育課程を通じて子供たちが変化の激しい社会を生きるために必要な資質・能力とは何かを明確にし、教科等を学ぶ本質的な意義を大切にしつつ、教科等横断的な視点も持って育成を目指していくこと、社会とのつながりを重視しながら学校の特色づくりを図っていくこと、現実の社会との関わりの中で子供たちの一人一人の豊かな学びを実現していくこと」が挙げられています。

このように、それぞれの学校においては、児童生徒にとってこれからの時代に必要な資質・能力とは何かを明確化し、各学校の教育活動を通してどのような資質・能力を育ていくかを具体的に示すことが求められています。

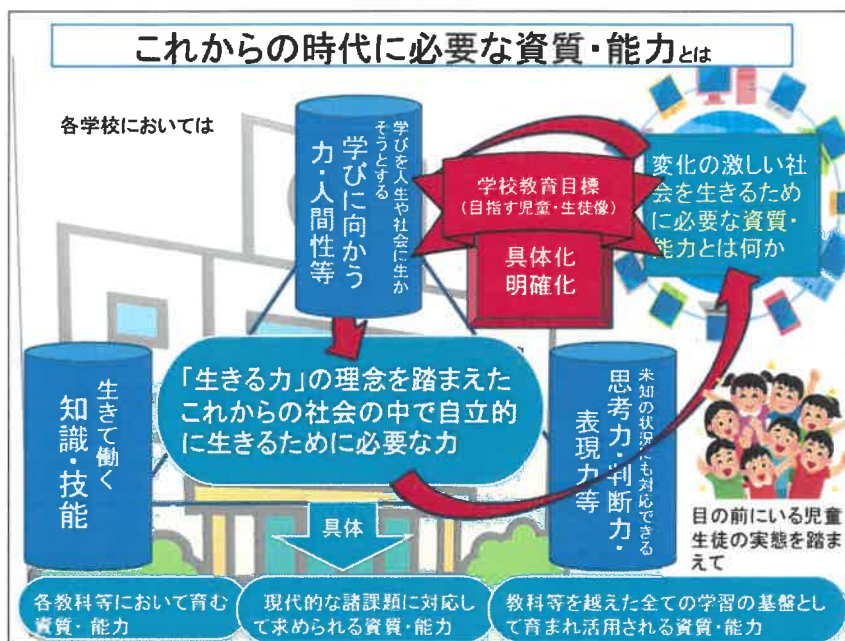
そして、各学校においてこれからの時代に必要な資質・能力を育むための有効な手立てや取り組みとして求められているのが「カリキュラム・マネジメント」です。

答申においても、カリキュラム・マネジメントとは「各学校が設定する学校教育目標を実現するために、学習指導要領等に基づき教育課程を編成し、それを実施・評価し改善していくこと」とし、その重要性が述べられています。

本総合教育センターでは、ハンドブック「カリキュラム・マネジメントのポイントと実践事例の紹介」を作成・頒布することで、各学校での「カリキュラム・マネジメント」の視点を通した「資質・能力」の育成の一助となるよう、学校教育の充実や新学習指導要領の実施に向けた学校支援に資することを目指しています。

本ハンドブックを手にとった先生方が、各学校のカリキュラム・マネジメントの推進や今後の教育活動の充実に役立ててくださることを願っています。

本ハンドブック「カリキュラム・マネジメントのポイントと実践事例の紹介」は、沖縄県立総合教育センターの平成30・31年度のプロジェクト研究を基に作成いたしました。本ハンドブックの内容をさらに理解いただくために、平成30・31年度の「調査研究報告書」もご参照ください。沖縄県立総合教育センターWeb ページからダウンロードできます。



第Ⅰ章 理論編

1 カリキュラム・マネジメントとは

カリキュラム・マネジメントとは、いったいどのようなものなのでしょうか。そして、どのような考え方に基づいて実施されるものなのでしょうか。

カリキュラム・マネジメントの定義について、新学習指導要領の総則には以下のように示されています。

各学校においては、児童^{※1}や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。※1 中学校・高等学校は生徒

新学習指導要領 総則

上記から、カリキュラム・マネジメントは、各学校の教育活動の質の向上を図っていく取り組みであることがわかります。そして、その取り組みを実施する主体はそれぞれの学校であり、まず自校の実態を把握することが求められています。その上で、教育活動の質の向上のための手立てや手段として教科等横断的な視点や教育課程の評価・改善、人的・物的資源の活用が挙げられています。

また、先行研究においてもカリキュラム・マネジメントの定義はさまざま存在しますが、カリキュラム・マネジメントの目的として共通するのは「学校教育目標の実現」です。

そして、カリキュラム・マネジメントの対象は、学校の教育活動と経営活動の全てを含みます。学校教育目標を実現するにはどのような工夫・改善が有効なのか、児童生徒一人一人の成長につなげるにはどのようにすればよいのかなどを常に意識することが大切です。

これらのことをふまえ、カリキュラム・マネジメントを、次のような言葉と図にまとめました。

カリキュラム・マネジメントとは

各学校が主体となって、学校教育目標の実現に向けて、学校の教育活動と経営活動の全体を工夫改善していきながら、学校教育活動の質の向上を図ること。



カリキュラム・マネジメントの目的は、「学校教育目標の実現」です。

手段が目的化しないように、何のために取り組むのかを常に意識しましょう。

2 カリキュラム・マネジメントの三つの側面

答申では、カリキュラム・マネジメントを、以下の三つの側面から捉えています。

カリキュラム・マネジメントの三つの側面		
側面①	側面②	側面③
教科等横断的な視点	PDCAサイクル	人的・物的資源の活用
各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。	教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。	教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

この三つの側面に取り組む際のポイントや留意点について、次のようにまとめました。

① 教科等横断的な視点について

各教科・領域等をどのようにつなげていくかについては、多種多様なつなげ方が考えられます。それでは、具体的に何をどのようにして教科等横断的な視点で各教科・領域等をつなげていけばいいのでしょうか。

答申には「学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと」と示されています。このように、ただ単に各教科・領域等をつなげるのではなく、学校教育目標が達成できるように、教科等横断的な視点で各教科・領域等をつなげていく必要があります。

新学習指導要領の総則では「教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成」について、以下のように示されています。

- (1) 各学校においては、児童^{※1}の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等^{※2}の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。
- (2) 各学校においては、児童^{※1}や学校、地域の実態及び児童^{※1}の発達の段階を考慮し、豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を、教科等横断的な視点で育成していくことができるよう、各学校の特色を生かした教育課程の編成を図るものとする。 ※1 中学校・高等学校は生徒 ※2 高校は各教科・科目等 （下線は作成者による。）

このように、各学校において教科等横断的な視点に立って育成が求められている資質・能力には、「学習の基盤となる資質・能力」や「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」があり、これらの資質・能力を育成できるように、教科等横断的な視点で各教科・科目等をつなげていく必要があります。

また、教科等横断的なカリキュラムの進め方について、田村（2016）は次のように述べています。

進め方は、まず、教科横断的に関連づける観点を明らかにします。「育てたい資質・能力（例：論理的思考力、主体的態度など）」「学習内容（例：総合的な学習の時間、道徳など）」「教育課題（例：キャリア教育、環境教育、安全教育、食育など）」「学習方法（例：言語活動、調べ方など）」が主な観点となります。そして、これらの観点から、各単元の意義をじっくりと考え、相互に関連づけられそうな単元を探し、線で結んだり、色分けしたり、表を作成したりして整理していきます。⁽¹⁾

このように、教科等横断的な視点に取り組む際には、何のために教科等横断をさせるのかを明確化する必要があります。その上で、各教科・領域等をつなげる観点を設定しましょう。そして、それぞれの学校の実態に応じて、つなげたい観点を設定し、学校教育目標の実現に向けた教育活動の質の向上を図っていきましょう。

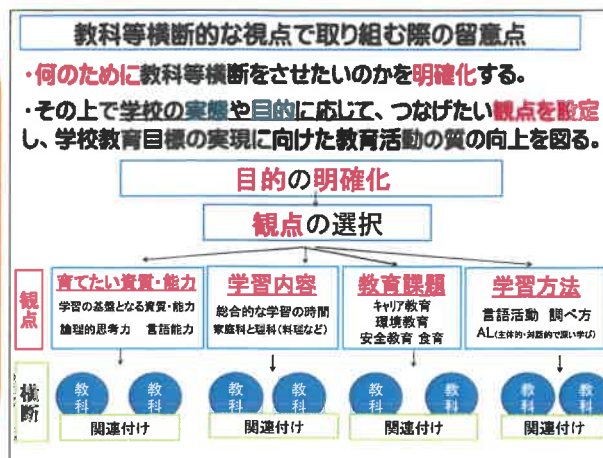
⁽¹⁾ 田村知子 2016 「教科等横断的な視点によるカリキュラム編成」田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編著『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい（p. 80）

これらのことを参考に、教科等横断的な視点で取り組む際の留意点を、次のような図にまとめました。

育てたい資質・能力でつなげますか？ 学習内容でつなげますか？ それとも…

目的を明確にしてから、つなげる観点を設定しましょう。

例えば、実践事例1（P）では、育てたい資質・能力（論理的思考力）で横断させている例が紹介されています。



② PDCAサイクルについて

PDCAサイクルの手法は、各学校においてこれまでも、教育課程を軸に教育活動や学校経営の見直しを図り、学校教育目標の実現に向けて活用してきたと思います。

それでは、より効果を上げるためには、今後、カリキュラム・マネジメントにおけるPDCAサイクルの活用に関して、どのようなことに留意する必要があるのでしょうか。

カリキュラム・マネジメントにおけるマネジメントサイクルについて、田村（2016）は、「カリキュラムを見直し、より良いものへと発展させていくプロセスが、マネジメントサイクルです」⁽²⁾と説明しています。また、マネジメントサイクルには「PDCAサイクル」や「PDSサイクル」など、様々な種類がありますが、田村（2011）は次のように述べています。

注意すべきは、「この形のマネジメントサイクルありき」ではない、ということである。大切なことは、計画・実施・評価・改善を連続的（各段階をつなぐ）、継続的（次のサイクルにつなぐ）、発展的（改善する）に循環させることである。⁽³⁾

カリキュラムマネジメントは、課題解決、改善を志向するので、何をどのように変えるのかを明らかにする評価・改善段階が「鍵」となる。⁽⁴⁾

このように、マネジメントサイクルには様々な種類がありますが、特定の型や順序にこだわるのではなく、教育活動と経営活動の質の向上に向けてのマネジメントサイクルを途切れさせず、常に回し続けることが大切です。

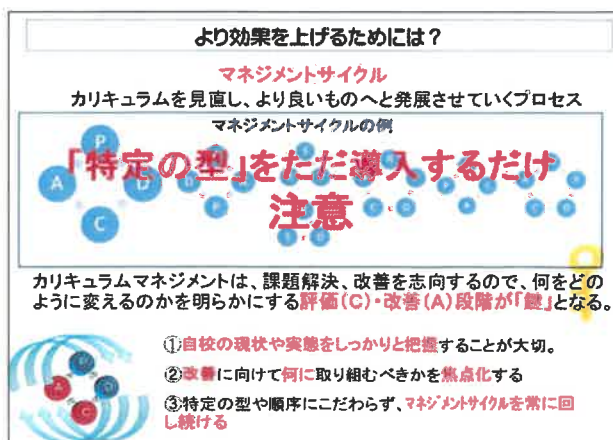
そして、より効果を上げるためにも、自校の現状や実態をしっかりと把握し、どのような課題があるかを見極め、教育活動と経営活動の改善に向けて何に取り組むべきかを焦点化していきましょう。

これらのことを参考に、PDCAサイクルに取り組む際の留意点を、次のような図にまとめました。

特定の型や順序にこだわらず、マネジメントサイクルを回し続けましょう。

まずは、自校の現状や課題を把握することが大切です。

例えば、実践事例4（P）では、アンケート調査を活用しながらPDCAサイクルを回している例が紹介されています。



③ 人的・物的資源の活用について

この側面は、学校教育活動の質の向上のための条件整備に関わるものです。それでは、人的・物的資源とは、具体的にどのようなものがあり、それらを活用する際には、どのようなことに留意していく必要があるのでしょうか。

答申には「今後、子供たちに求められる資質・能力を明確にして地域と共有したり、学校経営の見直しを図り学校の特色を作り上げたりするためには、教育課程の編成主体である各学校が、学校教育の軸となる教育課程の意義や役割を再確認し、地域の実情や子供たちの姿を踏まえながら、どのような資質・能力を育むことを目指し、そのためにどのような授業を行っていくのか、その実現に向けて、人材や予算、時間、情報、施設や設備、教育内容といった学校の資源をどう再分配していくのかを考え効果的に組み立てていくことが重要になる。」と示されています。

このことから、人的・物的資源とは、「人材」「予算」「時間」「情報」「設備・施設」「教育内容」などを指していることが分かります。そして、これらの人的・物的資源を活用する際には、育成を目指す資質・能力を明確にし、そのために必要な人的・物的資源とは何かを考えていきましょう。

また、校内の人的・物的資源についてですが、各学校の教育活動や経営活動の質の向上のためには、校内の様々な人材を生かす視点を持つことも大切です。OJTや教職員同士の学び合いなども、校内の人的・物的資源の活用の一例と考えられます。

校内・校外を含め、人的・物的資源を活用する際には、その目的を明らかにすることや、各学校の教育活動や経営活動の質の向上につなげる視点を持つことが大切です。

これらのことを参考に、人的・物的資源の活用をする際の留意点を、次のような図にまとめました。

人的・物的資源は、校内だけでなく、校外も含みます。

活用の際には、その目的を明らかにしておくことが大切です。

例えば、実践事例6（P ）では、外部講師（教育センターの主事）を招聘して、校内研修を実施した例が紹介されています。



⁽²⁾ 田村知子 2016 「カリキュラムマネジメントの全体構造を利用した実態分析」田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編者『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい (p. 37)

⁽³⁾ 田村知子 2011 「カリキュラムマネジメントの実践方法」田村知子編者『実践・カリキュラムマネジメント』 ぎょうせい (p. 12)

⁽⁴⁾ 同上 (p. 12)

3 カリキュラム・マネジメントの6つのタイプ

一口にカリキュラム・マネジメントと表現しても、学校の実態や取り組み方によって、その姿は多種多様です。それでは、カリキュラム・マネジメントにはどのようなタイプの実践が存在するのでしょうか。また、カリキュラム・マネジメントのイメージをどのように捉えればよいのでしょうか。

先行研究によると、カリキュラム・マネジメントを学校規模から授業・学級・個人まで、その対象の大きさや中心人物によって、レベル別やタイプ別に分類・整理がなされています。

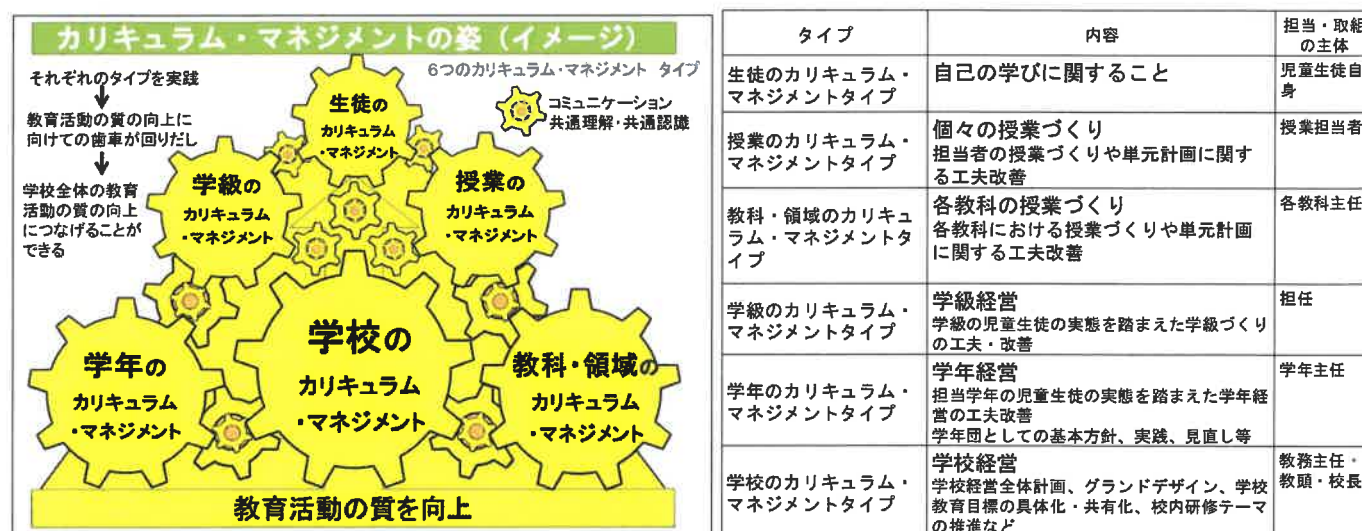
例えば、村川（2018）は、カリキュラム・マネジメントを5つのレベルでとらえています⁽⁵⁾。また、山崎（2018）は、「実際のカリキュラム・マネジメントにおいては、内容と方法、適用範囲、担当する主体によって、学校独自の階層的構造によるタイプがある」とし、4つのタイプで整理をしています⁽⁶⁾。

ただし、どのレベルやどのタイプのカリキュラム・マネジメントが大切というわけではありません。それぞれが重要であり、すべての教職員がカリキュラム・マネジメントに関わり、その主体となっています。

また、必ずしも、学校全体を対象とした大きなカリキュラム・マネジメントだけでなく、効果が上がりそうなところからまずは取り組み、学校全体へ良い影響を与えていくカリキュラム・マネジメントの在り方も考えられます。

各レベル・各タイプそれぞれのカリキュラム・マネジメントを実施することによって、教育活動の質の向上に向けての歯車が回りだし、コミュニケーションを大切にしながら共通理解や共通認識を図ることで、他のレベルやタイプとかみ合いながら、学校全体の教育活動の質の向上につなげることができると考えます。

これらのことを参考に、カリキュラム・マネジメントを次のようなイメージでとらえ、「6つのカリキュラム・マネジメントタイプ」として整理をしました。



カリキュラム・マネジメントの姿は、多種多様です。それぞれのタイプに取り組みながら、教育活動の質の向上に向けての歯車を回していきましょう。

そして、共通理解や共通認識を図り、各タイプと関連し合いながら、学校全体の教育活動の質の向上につなげていきましょう。

例えば、実践事例7（P ）では、学校のカリキュラム・マネジメントタイプを中心に、全職員が校長の学校経営ビジョンを共有し、授業改善を学校全体で組織的に行っている例が紹介されています。



⁽⁵⁾ 村川雅弘 2018 「1章 カリキュラム・マネジメントの基礎的・基本的な処方 22」 村川雅弘編集『学力向上・授業改善・学校改革 カリマネ 100 の処方箋』 教育開発研究所（pp. 28-29）

⁽⁶⁾ 山崎保寿 2018 「2 カリキュラム・マネジメントに関する先行研究および実践における階層的構造」『「社会に開かれた教育課程」のカリキュラム・マネジメント ―学力向上を図る教育環境の構築―』 学事出版（pp. 27-29）

4 カリキュラム・マネジメントに取り組む際の5つの視点

カリキュラム・マネジメントには、「教科等横断的な視点」「PDCAサイクル」「人的・物的資源の活用」の三つの側面がありますが、何をどのようにすれば、より効果的な取り組みになるのか、具体的な取り組みの視点を以下の5つにまとめました。

カリキュラム・マネジメントに取り組む際の5つの視点

視点①：学校教育目標を具体化・明確化する（みえる＝視覚化・具体化）

カリキュラム・マネジメントの目的は、学校教育目標の実現です。学校教育目標をしっかりと設定し、「目指す子ども像」や「つきたい力」を具体化しましょう。そして、育てたい児童・生徒像を明確にイメージできるようにし、全職員で共有しましょう。また、学校教育目標を実現するにはどのような工夫・改善が有効なのか、児童生徒一人一人の成長につなげるにはどのようにすればよいのかななどを常に意識することが大切です。

視点②：現状の実態把握をする（つかむ＝現状理解）

PDCA サイクルの効果を上げるためには、まずは現状や実態をしっかりと把握し、改善に向けて何に取り組むべきかを焦点化することが重要です。そうすることで、実効性のある改善活動につなげることができます。長所や課題も含め、現状の実態把握から始めてみましょう。

視点③：共通理解・共通認識を図る（つながる＝共有・チーム学校）

カリキュラム・マネジメントは管理者のみではなく、教職員一人一人がカリキュラム・マネジメントの当事者であり、自分ごととして捉える工夫が必要です。そのためには、職員間で課題を共有し、どのような児童生徒を育てたいのか、どのような資質・能力を育成したいのか、職員同士で話し合い、共通理解を図りましょう。

また、校内研修をワークショップ型で行うことも有効です。校内研修をワークショップ型にすることで、当事者としての意識を高めることができ、共通理解を図りながら職員一人一人が主体的に授業改善やよりよい学校づくりについて考えることを促すことができます。ただし、研修を実施する際は、なぜその研修が必要なのか、目的や意義を全職員でしっかりと理解しなければ、積極的で協働的な場は生まれにくいので、注意が必要です。

視点④：教育活動と経営活動をつなげる（つなげる＝横断・関連付け・活用）

教科等横断的な視点で各教科・領域等をどのようにつなげていくかについては、多種多様なつなげ方があります。ただし、目的と手段を混同しないように、何のために教科等横断をするのかを明確にした上で、関連させる観点を設定しましょう。そして、設定した観点から相互に関連付けられそうな教科や領域、単元などを考えます。学校の実態に応じて観点を設定し、学校教育目標の実現に向けた教育活動の質の向上を図りましょう。

また、校内・校外の人的・物的資源についても、何のために人的・物的資源を活用するのか、その目的を明確に持つことが大切です。カリキュラム・マネジメントに取り組む際には、学校の教育活動と経営活動の全てに関してつながりを意識し、教育活動の質の向上を図りながら、学校教育目標の実現を目指しましょう。

視点⑤：より良いものへ発展させるために回し続ける（まわす＝サイクル）

各学校における教育活動と経営活動の質の向上に向けて取り組んだことを、やりっぱなしにはせず、評価・改善を続けていきましょう。そして、マネジメントサイクルを途切れさせず、常に回し続け、カリキュラムをより良いものにしていきましょう。



《進め方》

視点①「学校教育目標の具体化・明確化」を柱として、視点②「現状の実態把握」をし、学校の実態に応じて視点③～⑤を取り入れながら、学校教育活動の質の向上を図りましょう。

第Ⅱ章 実践編

1 理論編を踏まえた実践事例の見方や活用の仕方

1 はじめに

これまでの理論研究にもとづき、「三つの側面」(P)、 「6つのカリキュラム・マネジメントタイプ」(P)、 「カリキュラム・マネジメントに取り組む際の5つの視点」(P)を柱として、実践研究に取り組みました。

次頁以降にその実践事例を紹介しています。なお、紙面の都合上、カリキュラム・マネジメントを「カリマネ」と略して表記している箇所もあります。

2 理論編を踏まえた実践事例の見方や活用の仕方

カリキュラム・マネジメントの取り組みは、各学校の実態に応じて多種多様です。そこで、各学校のカリキュラム・マネジメントの視点を通した取り組みの様子がより伝わるように、主に以下について示しました。

- ① 学校教育目標の実現に向けた児童生徒や学校の実態把握
- ② 身に付けさせたい力や解決したい課題の焦点化(①を元に具体化・焦点化しています)
- ③ 三つの側面やカリキュラム・マネジメントタイプ(ねらいに応じて取り組みを工夫し、職員の共通理解や共通認識を図ったり、教育活動と経営活動をつなげたりしながら、教育効果の最大化を図っています)
- ④ マネジメントサイクル(1年間の取り組みの流れ)
- ⑤ 特徴的な取り組み

実践事例① 県立G特別支援学校

「実行機能」アンケートを活用した授業改善のカリマネ

～程度知的障害のある生徒が主体的に取り組む力を育成するための研究を通して～

※実行機能とは目的をもって物事を達成するための能力のこと

学校紹介

- ・学級数：15クラス
- ・生徒数：133人
- ・学校の特徴：程度知的障害のある生徒が在籍し、国家的・社会的な自立を目指し職業教育を行っている。

学校教育目標(重点目標・目指す生徒像)

生徒一人一人の特性等を最大限に発揮させ、個性豊かな社会の自立を図り、能く善く誇りを持ち他とともに敬愛する心豊かな人間の育成を目指す。

生徒や学校の実態

① 実技のスキルを身につけることが比較的得意 ② 実行機能に課題のある生徒が多い

今回の「カリキュラム・マネジメント」(取り組み)のねらい

全職員が校長の学校経営ビジョンを共有し、実行機能の面から生徒の実態を捉え、定期的に学校内に生徒、職員が共に学び合う文化を醸成し、教職員お互いに信頼し合い尊重し合う関係を築く。

三つの側面

教科指導的な視点(全校でのメモ活用方法の指導)
PDCAサイクル(実行機能アンケートによる実態把握)
(全職員による授業のUD化チェック)
人的・物的資源の活用(外部講師による校内研修)
(近隣自治会等との連携)

カリキュラム・マネジメントタイプ

生徒 授業 教科・領域 学級 学理 学校

実用サービスコース(お菓子製造)の授業の様子

1年間の流れ

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
カリマネアンケートの実施	カリマネアンケートの結果を踏まえた授業改善の実施	カリマネアンケートの結果を踏まえた授業改善の実施	カリマネアンケートの結果を踏まえた授業改善の実施	カリマネアンケートの結果を踏まえた授業改善の実施	カリマネアンケートの結果を踏まえた授業改善の実施	カリマネアンケートの結果を踏まえた授業改善の実施	カリマネアンケートの結果を踏まえた授業改善の実施	カリマネアンケートの結果を踏まえた授業改善の実施	カリマネアンケートの結果を踏まえた授業改善の実施	カリマネアンケートの結果を踏まえた授業改善の実施

⑤特徴的な取り組み

「全職員へのカリマネアンケートの実施とフィードバック」

(概要)

教員や専任指導員に対し、カリキュラム・マネジメント、校内連携や業務改善の取り組み、意識的な学び続ける力についてのアンケートを行った。その結果について全職員対象の校内研修においてフィードバックを行った。

① 学校教育目標の実現に向けた児童生徒や学校の実態の把握

② 身に付けさせたい力や解決したい課題の焦点化

③ 三つの側面・主なカリキュラム・マネジメントタイプ

※ねらいに即した三つの側面の具体的な手立てや方法を示しました。

※カリマネタイプは、ねらいに迫るための中心的なタイプを口で囲んでいます。

④ マネジメントサイクル(1年の取り組み流れ)

果を共に、生徒の成長、支援方法の工夫改善を行った。

- ・実行機能に配慮した授業改善として、ワーキングメモリを考慮した授業のユニバーサルデザインを取り入れ、改善を行った。
- ・全校でメモ活用方法の指導を行い、生徒たちの実態にあったメモの取り方についての工夫、改善を行った。

「実行機能」に関するアンケート(一部抜粋)

質問	回答
1. 実行機能に関する取り組みについて、どのような取り組みを行っていますか?	実行機能に関する取り組みとして、ワーキングメモリを考慮した授業のユニバーサルデザインを取り入れ、改善を行った。
2. 実行機能に関する取り組みについて、どのような課題がありますか?	実行機能に関する取り組みとして、ワーキングメモリを考慮した授業のユニバーサルデザインを取り入れ、改善を行った。

※カリキュラム・マネジメントに、唯一絶対の姿はありません。各学校の実態に応じたカリキュラム・マネジメントに取り組むことが重要です。参考になる実践があれば、自校に適した形で取り入れながら、教育活動の質の向上につなげてください。各学校でカリキュラム・マネジメントに取り組む際のヒントになれば幸いです。

自分の考えを持ち、説明できる児童の育成

～教科等横断的な視点を取り入れた対話的な学習活動を通して～

学校紹介

(児童数 451 名 ・ 職員数 35 名)

学校教育目標(重点目標・目指す児童像)

☆明るく思いやりのある子

(相手の立場になって考え、適切な言動ができる)

☆よく聞き、よく考え、正しく判断する子

(自分の考えと比べながら相手の話を聞く・自分の考えを整理して
わかりやすく書く・自分の考えを筋道立ててわかりやすく話す)

☆ねばり強くたくましい子

(目標を持って、粘り強く最後まで取り組む)



今回の「カリキュラム・マネジメント」(取り組み)のねらい

論理的思考力を以下の3つとし、育成を目指す

- ①自分の考えと比べながら相手の話を聞く
- ②自分の考えを整理して、わかりやすく書く
- ③自分の考えを筋道立ててわかりやすく話す

三つの側面

教科等横断的な視点(「単元配列表」を活用し、何を学ぶか、何ができるようになったのかを児童と共有)

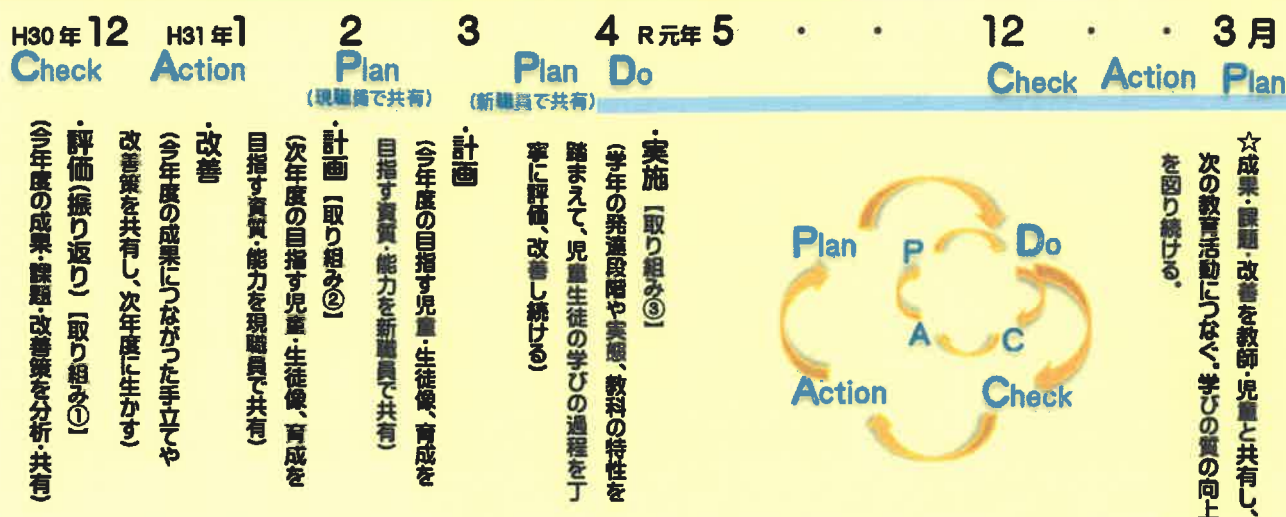
PDCA サイクル(データを活用し、丁寧な実態把握と評価を共有)

人的・物的資源の活用(内・外の人材を活用で、学校内・行政等と連携した実践)

カリキュラム・マネジメントタイプ

児童 授業 教科・領域 学級 学年 学校

学校のカリキュラム・マネジメントタイプ1年間の流れ



【側面2:PDCA サイクルの視点】 データを活用し成果をさらに伸ばす、課題の改善に向けて手立てを見直す

「児童の育ちを評価！今年度の評価を次年度につなぐ、いかす！」

「学校教育目標（目指す児童像）」＝「今年度育成を目指す資質・能力」に児童がどれだけ近づくことができたか（児童の評価の視点）、どれだけ近づけることができたか（教師の評価の視点）を児童と教師間で共有します。また、次年度につなぎ、いかすために評価することが大切です。

ねらい:今年度の取り組みの成果や課題を全職員で共有し、次年度の取り組みの充実を図る。

日時:11月後半～12月（所要時間 70分～90分）

内容:校内研修(全体会)。今年度の評価と改善点の共有を行う。

今年度の取り組みを全職員で振り返り、成果・課題・課題の改善策を共有する。

担当:取り組みの主体:校内研究主任・学推主任・教務主任を中心に全職員

手法:ワークショップ型校内研修(SWOT分析・ランキング)

準備:①これまでの調査結果(学校評価:児童用・職員用・保護者用、Assess 調査(学級適応感をとらえる調査)全国学力学習状況調査(意識調査等) ②SWOT分析シート(各学年用6枚) ③付せん紙(3色) ④マジックペン(黒・赤各6本)

諸調査の結果を学校教育目標や目指す児童像と照らし合わせながら成果（学校教育目標に児童がどれだけ近づくことができたか、何ができるようになったか等）や課題（変容が見られなかった項目等）を学年で分析します。そしてその分析結果を全体で共有し、次年度へつないでいきます。そのため、評価（振り返り）は、**11月～12月頃**に実施する方が良いでしょう。今年度の取り組みを次年度につないだり積み重ねたりすることで、児童の成長や実態に合わせた教育活動の推進ができます。



学年で今年度の振り返りをしている様子。
データを基に分析を行い、成果と課題、改善策を話し合うことで児童の成長や成果につなげた実践を共有。

令和元年度 学校評価(児童アンケート) 元年度 7月実施	
児童アンケート 学年 1組	
番号	児童の評価
学校でのこと	1 学校へ行くのがたのしい。
	2 学級に仲のよい友だちがいる。
	3 自分から進んであいさつができる
	4 学習の準備をしてから、トイレや水飲みに行っている
	5 チャイムがなる前に席に着いている
	6 黙想(静かな時間)をしてから授業を始めている
	7 授業は楽しい
	8 授業では先生の話をしっかり聞いている
	9 黙清掃をし、全員で清掃終わりのあいさつをしている
先生のこと	10 先生の授業はわかりやすく、授業に関係した宿題を出している
	11 先生は、みんなの意見を取り上げて授業を進めてくれる
	12 先生はノートや作品に〇やコメントを入れてくれる
自分ごと、おうちでのこと	13 先生は自分の話を聞いたり相談にのったりしてくれる
	14 自分から先に「あいさつ」している
	15 名前を呼ばれたら、きちんと「返事」をしている
	16 テストの間違いをなおしたり、学習用品の片付け「後始末」をしっかりできる
	17 将来の夢や目標がある
	18 毎日、家庭学習(宿題)や読書をしている
	19 私の家では、「ノーゲーム・ノーテレビの時間」が週1回ある
	20 早寝(9時)・早起き(6時)をしている
	21 毎日、朝ご飯を食べている
	22 命の大切さや社会のきまりがわかり、守っている
	23 危険なときの行動のしかたがわかる(地震、火災、不審者)
	24 学校のできごとを家の人に話している
	25 学校に歩いて登校している
	26 登校したら、朝の活動に取り組んでいる
	27 私の家のきまりや約束がある
	28 おうちでは、自分にできる仕事(お手伝い)がある

A 小学校の振り返りで活用した「学校評価調査用紙」

ー 評価のながれ ー

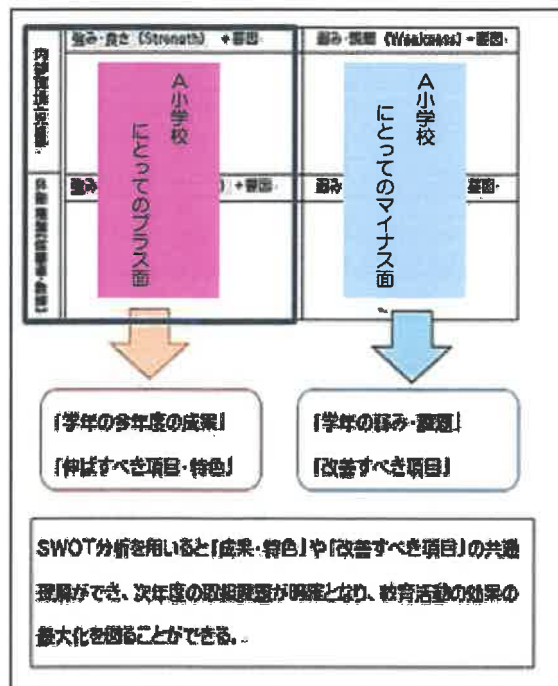
- 学年ごとにグループを編成する。(1学年～6学年の6グループ)
- 付せん紙3色(成果:桃色、課題:水色、改善策:黄色)、マジックペン(黒・赤)を各グループに配布する。
- 諸調査の結果を各学年に配布する。(これまでの調査結果と今年度の調査結果)

1. ワークショップⅠ：今年度の取り組みの成果と課題を振りかえる(各調査結果のデータ活用)

- ①担当学年のこれまでの調査結果と今年度の調査結果から、児童について、**どのような力が伸びたか**、どの設問に**変容**があったのかなどを比較する。
- ②児童の変容から、学級、学年の取り組みの視点、児童の視点から成果(強み)、課題(弱み)をSWOT分析シートに書き込みながら整理し、学年で共有する。
- ③この時、児童の成長や成果につながった学級の取り組みを共有したり、学年の取り組みを再確認したりする。



担当学年で、データを基にみてきた今年度の教育活動の良さや課題を、SWOT分析シートで整理している様子。



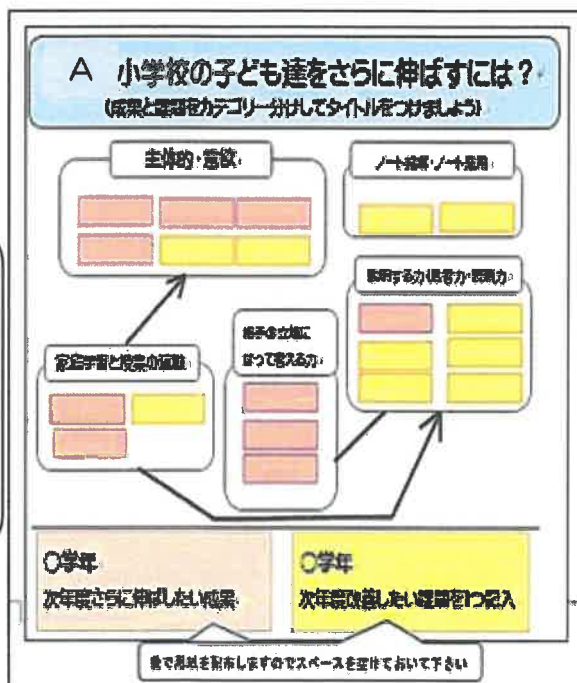
ワークショップⅠで使用した SWOT 分析シート

2. ワークショップⅡ：成果と課題、改善策をランキングし、全体で共有する

- ①各学年で作成したSWOT分析シートをもとに成果を桃色、課題を水色、改善策を黄色の付せん紙に書き出し、とりのご用紙にカテゴリーごとに分類し、キーワードを書いてまとめていく(KJ法)。
- ②各学年でまとめたキーワードを、全体で共有する。



同じキーワードでも、学級によって成果や課題が異なることを共有することで、具体的な手立ての改善策が見えてくる。



ワークショップⅡで使用した KJ 法のシート

- ③各学年でまとめたキーワードをもとに、成果・課題を各1つずつ短冊紙に書き、紹介しながら黒板に貼る。
- ④短冊紙にあるキーワードを次年度の目指す児童像や校内研究のテーマにし、今年度の教育活動を次年度に生かしていく。

【側面1:教科等横断的な視点】「単元配列表」を活用して、ゴールと手立てを児童・教師間で共有し、共通実践へ

「共有が鍵！ 学校組織力アップで教育効果の最大化を図る！」

今年度の成果をさらに伸ばし自校の強みへつなげていくための取り組みとして、課題を改善し良さを増やす等、評価をもとに次年度の目指す児童像（ゴールの姿）や校内研究テーマ（方法：共通実践）、「単元配列表」の作成（学習内容とねらいの共有）、ループリックの作成（評価の視点を共有）を全職員で行います。教育効果の最大化を図ることが目的であるため、全職員で作成・活用、見直し、修正・改善を続けることが大切です。

ねらい：児童の学びの実態に応じた教育実践に向け、今年度の評価を次年度に生かす手立ての共有を図る。

日時：12～1月（所要時間：70～90分）

内容：校内研修(全体会)次年度の計画をたてる。

今年度の評価を生かし、次年度の共通実践を可視化する。

担当：取組の主体:校内研究主任・学推主任・教務主任を中心に全職員

手法：ワークショップ型校内研修(単元配列表の作成)

準備：①今年度の評価(前回の校内研修で分析したSWOT分析資料・ランキング表

②カラー全紙2枚又はA3用紙(学年の実態に応じて)

③全教科書・各教科の指導書

学習効果の最大化を図るには共有が鍵となります。1年後のゴールの姿、この単元でどのような力を付けるのか、どのような方法で取り組むかなど、児童・教師間で共有し共通実践を行うことで具現化を図ることができます。「単元配列表」を作成し、活用することで可視化・共有化が図られます。実践する中で見直しを行い、修正・改善を重ねて児童の実態に応じた教育活動へつなげてきます。

— 第1学年の「単元配列表」 —

柱とする教科を国語とした例。赤枠の単元は論理的思考力を特に意識！

学年・学校	国語	算数	理科	社会	総合	体育	音楽	美術	外国語	道徳	保健	生活	家庭	その他
第1学年	1. 国語 2. 国語 3. 国語 4. 国語 5. 国語 6. 国語 7. 国語 8. 国語 9. 国語 10. 国語 11. 国語 12. 国語 13. 国語 14. 国語 15. 国語 16. 国語 17. 国語 18. 国語 19. 国語 20. 国語 21. 国語 22. 国語 23. 国語 24. 国語 25. 国語 26. 国語 27. 国語 28. 国語 29. 国語 30. 国語 31. 国語 32. 国語 33. 国語 34. 国語 35. 国語 36. 国語 37. 国語 38. 国語 39. 国語 40. 国語 41. 国語 42. 国語 43. 国語 44. 国語 45. 国語 46. 国語 47. 国語 48. 国語 49. 国語 50. 国語 51. 国語 52. 国語 53. 国語 54. 国語 55. 国語 56. 国語 57. 国語 58. 国語 59. 国語 60. 国語 61. 国語 62. 国語 63. 国語 64. 国語 65. 国語 66. 国語 67. 国語 68. 国語 69. 国語 70. 国語 71. 国語 72. 国語 73. 国語 74. 国語 75. 国語 76. 国語 77. 国語 78. 国語 79. 国語 80. 国語 81. 国語 82. 国語 83. 国語 84. 国語 85. 国語 86. 国語 87. 国語 88. 国語 89. 国語 90. 国語 91. 国語 92. 国語 93. 国語 94. 国語 95. 国語 96. 国語 97. 国語 98. 国語 99. 国語 100. 国語	1. 算数 2. 算数 3. 算数 4. 算数 5. 算数 6. 算数 7. 算数 8. 算数 9. 算数 10. 算数 11. 算数 12. 算数 13. 算数 14. 算数 15. 算数 16. 算数 17. 算数 18. 算数 19. 算数 20. 算数 21. 算数 22. 算数 23. 算数 24. 算数 25. 算数 26. 算数 27. 算数 28. 算数 29. 算数 30. 算数 31. 算数 32. 算数 33. 算数 34. 算数 35. 算数 36. 算数 37. 算数 38. 算数 39. 算数 40. 算数 41. 算数 42. 算数 43. 算数 44. 算数 45. 算数 46. 算数 47. 算数 48. 算数 49. 算数 50. 算数 51. 算数 52. 算数 53. 算数 54. 算数 55. 算数 56. 算数 57. 算数 58. 算数 59. 算数 60. 算数 61. 算数 62. 算数 63. 算数 64. 算数 65. 算数 66. 算数 67. 算数 68. 算数 69. 算数 70. 算数 71. 算数 72. 算数 73. 算数 74. 算数 75. 算数 76. 算数 77. 算数 78. 算数 79. 算数 80. 算数 81. 算数 82. 算数 83. 算数 84. 算数 85. 算数 86. 算数 87. 算数 88. 算数 89. 算数 90. 算数 91. 算数 92. 算数 93. 算数 94. 算数 95. 算数 96. 算数 97. 算数 98. 算数 99. 算数 100. 算数	1. 理科 2. 理科 3. 理科 4. 理科 5. 理科 6. 理科 7. 理科 8. 理科 9. 理科 10. 理科 11. 理科 12. 理科 13. 理科 14. 理科 15. 理科 16. 理科 17. 理科 18. 理科 19. 理科 20. 理科 21. 理科 22. 理科 23. 理科 24. 理科 25. 理科 26. 理科 27. 理科 28. 理科 29. 理科 30. 理科 31. 理科 32. 理科 33. 理科 34. 理科 35. 理科 36. 理科 37. 理科 38. 理科 39. 理科 40. 理科 41. 理科 42. 理科 43. 理科 44. 理科 45. 理科 46. 理科 47. 理科 48. 理科 49. 理科 50. 理科 51. 理科 52. 理科 53. 理科 54. 理科 55. 理科 56. 理科 57. 理科 58. 理科 59. 理科 60. 理科 61. 理科 62. 理科 63. 理科 64. 理科 65. 理科 66. 理科 67. 理科 68. 理科 69. 理科 70. 理科 71. 理科 72. 理科 73. 理科 74. 理科 75. 理科 76. 理科 77. 理科 78. 理科 79. 理科 80. 理科 81. 理科 82. 理科 83. 理科 84. 理科 85. 理科 86. 理科 87. 理科 88. 理科 89. 理科 90. 理科 91. 理科 92. 理科 93. 理科 94. 理科 95. 理科 96. 理科 97. 理科 98. 理科 99. 理科 100. 理科	1. 社会 2. 社会 3. 社会 4. 社会 5. 社会 6. 社会 7. 社会 8. 社会 9. 社会 10. 社会 11. 社会 12. 社会 13. 社会 14. 社会 15. 社会 16. 社会 17. 社会 18. 社会 19. 社会 20. 社会 21. 社会 22. 社会 23. 社会 24. 社会 25. 社会 26. 社会 27. 社会 28. 社会 29. 社会 30. 社会 31. 社会 32. 社会 33. 社会 34. 社会 35. 社会 36. 社会 37. 社会 38. 社会 39. 社会 40. 社会 41. 社会 42. 社会 43. 社会 44. 社会 45. 社会 46. 社会 47. 社会 48. 社会 49. 社会 50. 社会 51. 社会 52. 社会 53. 社会 54. 社会 55. 社会 56. 社会 57. 社会 58. 社会 59. 社会 60. 社会 61. 社会 62. 社会 63. 社会 64. 社会 65. 社会 66. 社会 67. 社会 68. 社会 69. 社会 70. 社会 71. 社会 72. 社会 73. 社会 74. 社会 75. 社会 76. 社会 77. 社会 78. 社会 79. 社会 80. 社会 81. 社会 82. 社会 83. 社会 84. 社会 85. 社会 86. 社会 87. 社会 88. 社会 89. 社会 90. 社会 91. 社会 92. 社会 93. 社会 94. 社会 95. 社会 96. 社会 97. 社会 98. 社会 99. 社会 100. 社会	1. 総合 2. 総合 3. 総合 4. 総合 5. 総合 6. 総合 7. 総合 8. 総合 9. 総合 10. 総合 11. 総合 12. 総合 13. 総合 14. 総合 15. 総合 16. 総合 17. 総合 18. 総合 19. 総合 20. 総合 21. 総合 22. 総合 23. 総合 24. 総合 25. 総合 26. 総合 27. 総合 28. 総合 29. 総合 30. 総合 31. 総合 32. 総合 33. 総合 34. 総合 35. 総合 36. 総合 37. 総合 38. 総合 39. 総合 40. 総合 41. 総合 42. 総合 43. 総合 44. 総合 45. 総合 46. 総合 47. 総合 48. 総合 49. 総合 50. 総合 51. 総合 52. 総合 53. 総合 54. 総合 55. 総合 56. 総合 57. 総合 58. 総合 59. 総合 60. 総合 61. 総合 62. 総合 63. 総合 64. 総合 65. 総合 66. 総合 67. 総合 68. 総合 69. 総合 70. 総合 71. 総合 72. 総合 73. 総合 74. 総合 75. 総合 76. 総合 77. 総合 78. 総合 79. 総合 80. 総合 81. 総合 82. 総合 83. 総合 84. 総合 85. 総合 86. 総合 87. 総合 88. 総合 89. 総合 90. 総合 91. 総合 92. 総合 93. 総合 94. 総合 95. 総合 96. 総合 97. 総合 98. 総合 99. 総合 100. 総合	1. 体育 2. 体育 3. 体育 4. 体育 5. 体育 6. 体育 7. 体育 8. 体育 9. 体育 10. 体育 11. 体育 12. 体育 13. 体育 14. 体育 15. 体育 16. 体育 17. 体育 18. 体育 19. 体育 20. 体育 21. 体育 22. 体育 23. 体育 24. 体育 25. 体育 26. 体育 27. 体育 28. 体育 29. 体育 30. 体育 31. 体育 32. 体育 33. 体育 34. 体育 35. 体育 36. 体育 37. 体育 38. 体育 39. 体育 40. 体育 41. 体育 42. 体育 43. 体育 44. 体育 45. 体育 46. 体育 47. 体育 48. 体育 49. 体育 50. 体育 51. 体育 52. 体育 53. 体育 54. 体育 55. 体育 56. 体育 57. 体育 58. 体育 59. 体育 60. 体育 61. 体育 62. 体育 63. 体育 64. 体育 65. 体育 66. 体育 67. 体育 68. 体育 69. 体育 70. 体育 71. 体育 72. 体育 73. 体育 74. 体育 75. 体育 76. 体育 77. 体育 78. 体育 79. 体育 80. 体育 81. 体育 82. 体育 83. 体育 84. 体育 85. 体育 86. 体育 87. 体育 88. 体育 89. 体育 90. 体育 91. 体育 92. 体育 93. 体育 94. 体育 95. 体育 96. 体育 97. 体育 98. 体育 99. 体育 100. 体育	1. 音楽 2. 音楽 3. 音楽 4. 音楽 5. 音楽 6. 音楽 7. 音楽 8. 音楽 9. 音楽 10. 音楽 11. 音楽 12. 音楽 13. 音楽 14. 音楽 15. 音楽 16. 音楽 17. 音楽 18. 音楽 19. 音楽 20. 音楽 21. 音楽 22. 音楽 23. 音楽 24. 音楽 25. 音楽 26. 音楽 27. 音楽 28. 音楽 29. 音楽 30. 音楽 31. 音楽 32. 音楽 33. 音楽 34. 音楽 35. 音楽 36. 音楽 37. 音楽 38. 音楽 39. 音楽 40. 音楽 41. 音楽 42. 音楽 43. 音楽 44. 音楽 45. 音楽 46. 音楽 47. 音楽 48. 音楽 49. 音楽 50. 音楽 51. 音楽 52. 音楽 53. 音楽 54. 音楽 55. 音楽 56. 音楽 57. 音楽 58. 音楽 59. 音楽 60. 音楽 61. 音楽 62. 音楽 63. 音楽 64. 音楽 65. 音楽 66. 音楽 67. 音楽 68. 音楽 69. 音楽 70. 音楽 71. 音楽 72. 音楽 73. 音楽 74. 音楽 75. 音楽 76. 音楽 77. 音楽 78. 音楽 79. 音楽 80. 音楽 81. 音楽 82. 音楽 83. 音楽 84. 音楽 85. 音楽 86. 音楽 87. 音楽 88. 音楽 89. 音楽 90. 音楽 91. 音楽 92. 音楽 93. 音楽 94. 音楽 95. 音楽 96. 音楽 97. 音楽 98. 音楽 99. 音楽 100. 音楽	1. 美術 2. 美術 3. 美術 4. 美術 5. 美術 6. 美術 7. 美術 8. 美術 9. 美術 10. 美術 11. 美術 12. 美術 13. 美術 14. 美術 15. 美術 16. 美術 17. 美術 18. 美術 19. 美術 20. 美術 21. 美術 22. 美術 23. 美術 24. 美術 25. 美術 26. 美術 27. 美術 28. 美術 29. 美術 30. 美術 31. 美術 32. 美術 33. 美術 34. 美術 35. 美術 36. 美術 37. 美術 38. 美術 39. 美術 40. 美術 41. 美術 42. 美術 43. 美術 44. 美術 45. 美術 46. 美術 47. 美術 48. 美術 49. 美術 50. 美術 51. 美術 52. 美術 53. 美術 54. 美術 55. 美術 56. 美術 57. 美術 58. 美術 59. 美術 60. 美術 61. 美術 62. 美術 63. 美術 64. 美術 65. 美術 66. 美術 67. 美術 68. 美術 69. 美術 70. 美術 71. 美術 72. 美術 73. 美術 74. 美術 75. 美術 76. 美術 77. 美術 78. 美術 79. 美術 80. 美術 81. 美術 82. 美術 83. 美術 84. 美術 85. 美術 86. 美術 87. 美術 88. 美術 89. 美術 90. 美術 91. 美術 92. 美術 93. 美術 94. 美術 95. 美術 96. 美術 97. 美術 98. 美術 99. 美術 100. 美術	1. 外国語 2. 外国語 3. 外国語 4. 外国語 5. 外国語 6. 外国語 7. 外国語 8. 外国語 9. 外国語 10. 外国語 11. 外国語 12. 外国語 13. 外国語 14. 外国語 15. 外国語 16. 外国語 17. 外国語 18. 外国語 19. 外国語 20. 外国語 21. 外国語 22. 外国語 23. 外国語 24. 外国語 25. 外国語 26. 外国語 27. 外国語 28. 外国語 29. 外国語 30. 外国語 31. 外国語 32. 外国語 33. 外国語 34. 外国語 35. 外国語 36. 外国語 37. 外国語 38. 外国語 39. 外国語 40. 外国語 41. 外国語 42. 外国語 43. 外国語 44. 外国語 45. 外国語 46. 外国語 47. 外国語 48. 外国語 49. 外国語 50. 外国語 51. 外国語 52. 外国語 53. 外国語 54. 外国語 55. 外国語 56. 外国語 57. 外国語 58. 外国語 59. 外国語 60. 外国語 61. 外国語 62. 外国語 63. 外国語 64. 外国語 65. 外国語 66. 外国語 67. 外国語 68. 外国語 69. 外国語 70. 外国語 71. 外国語 72. 外国語 73. 外国語 74. 外国語 75. 外国語 76. 外国語 77. 外国語 78. 外国語 79. 外国語 80. 外国語 81. 外国語 82. 外国語 83. 外国語 84. 外国語 85. 外国語 86. 外国語 87. 外国語 88. 外国語 89. 外国語 90. 外国語 91. 外国語 92. 外国語 93. 外国語 94. 外国語 95. 外国語 96. 外国語 97. 外国語 98. 外国語 99. 外国語 100. 外国語	1. 道徳 2. 道徳 3. 道徳 4. 道徳 5. 道徳 6. 道徳 7. 道徳 8. 道徳 9. 道徳 10. 道徳 11. 道徳 12. 道徳 13. 道徳 14. 道徳 15. 道徳 16. 道徳 17. 道徳 18. 道徳 19. 道徳 20. 道徳 21. 道徳 22. 道徳 23. 道徳 24. 道徳 25. 道徳 26. 道徳 27. 道徳 28. 道徳 29. 道徳 30. 道徳 31. 道徳 32. 道徳 33. 道徳 34. 道徳 35. 道徳 36. 道徳 37. 道徳 38. 道徳 39. 道徳 40. 道徳 41. 道徳 42. 道徳 43. 道徳 44. 道徳 45. 道徳 46. 道徳 47. 道徳 48. 道徳 49. 道徳 50. 道徳 51. 道徳 52. 道徳 53. 道徳 54. 道徳 55. 道徳 56. 道徳 57. 道徳 58. 道徳 59. 道徳 60. 道徳 61. 道徳 62. 道徳 63. 道徳 64. 道徳 65. 道徳 66. 道徳 67. 道徳 68. 道徳 69. 道徳 70. 道徳 71. 道徳 72. 道徳 73. 道徳 74. 道徳 75. 道徳 76. 道徳 77. 道徳 78. 道徳 79. 道徳 80. 道徳 81. 道徳 82. 道徳 83. 道徳 84. 道徳 85. 道徳 86. 道徳 87. 道徳 88. 道徳 89. 道徳 90. 道徳 91. 道徳 92. 道徳 93. 道徳 94. 道徳 95. 道徳 96. 道徳 97. 道徳 98. 道徳 99. 道徳 100. 道徳	1. 保健 2. 保健 3. 保健 4. 保健 5. 保健 6. 保健 7. 保健 8. 保健 9. 保健 10. 保健 11. 保健 12. 保健 13. 保健 14. 保健 15. 保健 16. 保健 17. 保健 18. 保健 19. 保健 20. 保健 21. 保健 22. 保健 23. 保健 24. 保健 25. 保健 26. 保健 27. 保健 28. 保健 29. 保健 30. 保健 31. 保健 32. 保健 33. 保健 34. 保健 35. 保健 36. 保健 37. 保健 38. 保健 39. 保健 40. 保健 41. 保健 42. 保健 43. 保健 44. 保健 45. 保健 46. 保健 47. 保健 48. 保健 49. 保健 50. 保健 51. 保健 52. 保健 53. 保健 54. 保健 55. 保健 56. 保健 57. 保健 58. 保健 59. 保健 60. 保健 61. 保健 62. 保健 63. 保健 64. 保健 65. 保健 66. 保健 67. 保健 68. 保健 69. 保健 70. 保健 71. 保健 72. 保健 73. 保健 74. 保健 75. 保健 76. 保健 77. 保健 78. 保健 79. 保健 80. 保健 81. 保健 82. 保健 83. 保健 84. 保健 85. 保健 86. 保健 87. 保健 88. 保健 89. 保健 90. 保健 91. 保健 92. 保健 93. 保健 94. 保健 95. 保健 96. 保健 97. 保健 98. 保健 99. 保健 100. 保健	1. 生活 2. 生活 3. 生活 4. 生活 5. 生活 6. 生活 7. 生活 8. 生活 9. 生活 10. 生活 11. 生活 12. 生活 13. 生活 14. 生活 15. 生活 16. 生活 17. 生活 18. 生活 19. 生活 20. 生活 21. 生活 22. 生活 23. 生活 24. 生活 25. 生活 26. 生活 27. 生活 28. 生活 29. 生活 30. 生活 31. 生活 32. 生活 33. 生活 34. 生活 35. 生活 36. 生活 37. 生活 38. 生活 39. 生活 40. 生活 41. 生活 42. 生活 43. 生活 44. 生活 45. 生活 46. 生活 47. 生活 48. 生活 49. 生活 50. 生活 51. 生活 52. 生活 53. 生活 54. 生活 55. 生活 56. 生活 57. 生活 58. 生活 59. 生活 60. 生活 61. 生活 62. 生活 63. 生活 64. 生活 65. 生活 66. 生活 67. 生活 68. 生活 69. 生活 70. 生活 71. 生活 72. 生活 73. 生活 74. 生活 75. 生活 76. 生活 77. 生活 78. 生活 79. 生活 80. 生活 81. 生活 82. 生活 83. 生活 84. 生活 85. 生活 86. 生活 87. 生活 88. 生活 89. 生活 90. 生活 91. 生活 92. 生活 93. 生活 94. 生活 95. 生活 96. 生活 97. 生活 98. 生活 99. 生活 100. 生活	1. 家庭 2. 家庭 3. 家庭 4. 家庭 5. 家庭 6. 家庭 7. 家庭 8. 家庭 9. 家庭 10. 家庭 11. 家庭 12. 家庭 13. 家庭 14. 家庭 15. 家庭 16. 家庭 17. 家庭 18. 家庭 19. 家庭 20. 家庭 21. 家庭 22. 家庭 23. 家庭 24. 家庭 25. 家庭 26. 家庭 27. 家庭 28. 家庭 29. 家庭 30. 家庭 31. 家庭 32. 家庭 33. 家庭 34. 家庭 35. 家庭 36. 家庭 37. 家庭 38. 家庭 39. 家庭 40. 家庭 41. 家庭 42. 家庭 43. 家庭 44. 家庭 45. 家庭 46. 家庭 47. 家庭 48. 家庭 49. 家庭 50. 家庭 51. 家庭 52. 家庭 53. 家庭 54. 家庭 55. 家庭 56. 家庭 57. 家庭 58. 家庭 59. 家庭 60. 家庭 61. 家庭 62. 家庭 63. 家庭 64. 家庭 65. 家庭 66. 家庭 67. 家庭 68. 家庭 69. 家庭 70. 家庭 71. 家庭 72. 家庭 73. 家庭 74. 家庭 75. 家庭 76. 家庭 77. 家庭 78. 家庭 79. 家庭 80. 家庭 81. 家庭 82. 家庭 83. 家庭 84. 家庭 85. 家庭 86. 家庭 87. 家庭 88. 家庭 89. 家庭 90. 家庭 91. 家庭 92. 家庭 93. 家庭 94. 家庭 95. 家庭 96. 家庭 97. 家庭 98. 家庭 99. 家庭 100. 家庭	1. その他 2. その他 3. その他 4. その他 5. その他 6. その他 7. その他 8. その他 9. その他 10. その他 11. その他 12. その他 13. その他 14. その他 15. その他 16. その他 17. その他 18. その他 19. その他 20. その他 21. その他 22. その他 23. その他 24. その他 25. その他 26. その他 27. その他 28. その他 29. その他 30. その他 31. その他 32. その他 33. その他 34. その他 35. その他 36. その他 37. その他 38. その他 39. その他 40. その他 41. その他 42. その他 43. その他 44. その他 45. その他 46. その他 47. その他 48. その他 49. その他 50. その他 51. その他 52. その他 53. その他 54. その他 55. その他 56. その他 57. その他 58. その他 59. その他 60. その他 61. その他 62. その他 63. その他 64. その他 65. その他 66. その他 67. その他 68. その他 69. その他 70. その他 71. その他 72. その他 73. その他 74. その他 75. その他 76. その他 77. その他 78. その他 79. その他 80. その他 81. その他 82. その他 83. その他 84. その他 85. その他 86. その他 87. その他 88. その他 89. その他 90. その他 91. その他 92. その他 93. その他 94. その他 95. その他 96. その他 97. その他 98. その他 99. その他 100. その他

共通実践へ向けて作成した第1学年「単元配列表」 平成31年度版

4月は新職員で「単元配列表」を見直し、共通実践へ！

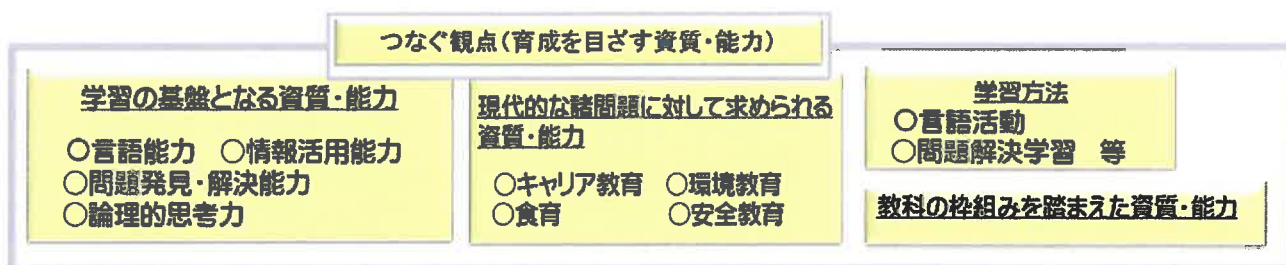
つくってみよう！「単元配列表」

「単元配列表」作成のポイント

- ① 「単元配列表」は学年ごとに作成する。今年度「育成を目指す資質・能力」(つなぐ力・観点)は全学年共通。
- ② 学習のねらいや内容をとらえ直し、いつ、何を、どのように学ぶかを学年・教科等で話し合い、柱にする教科や行事を決める。
- ③ 単元を矢印でつないだり、枠で囲むなど、つながりを可視化すると共有しやすい。

「単元配列表」作成に向け、学校全体で、育成を目指す資質・能力をしぼり、共有しておくことが大切です。児童の発達段階や学習内容に応じ、各教育活動で目指す姿は異なりますが、育成を目指す資質・能力は同じですので、組織として取り組むと効果が期待できます。昨年度の成果をさらに伸ばし強みにしていくか、または課題を改善し良さを増やしていくかも含めて学校全体で話し合っているとよいでしょう。

平成31年度のA小学校では、校内研究のテーマを「自分の考えを持ち、説明できる児童の育成」とし、論理的思考力の育成を可視化し全職員で実践していきました。



各教科をつなぐ観点(育成を目指す資質・能力)

作成手順：第2学年の「単元配列表」の作成。生活科を柱に「論理的思考力の育成」をつなぐ視点

①教科等横断的につなぐ観点(育成を目指す資質・能力)

を明らかにする。

※各調査の結果を基に、「論理的思考力」をつなぐ観点として全体職員で決定。

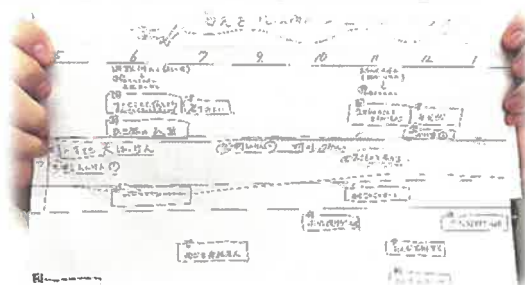
②つなぐ観点から学習のねらいや内容をとらえ直し、いつ、何をどのように学ぶかを学年や教科会で話し合い、柱にする教科や行事等を決める。

※精選した方がよいか、単元を入れ替えて同じ時期に行うか、時期をずらして繰り返すか等、単元の効果的な配列も考える。

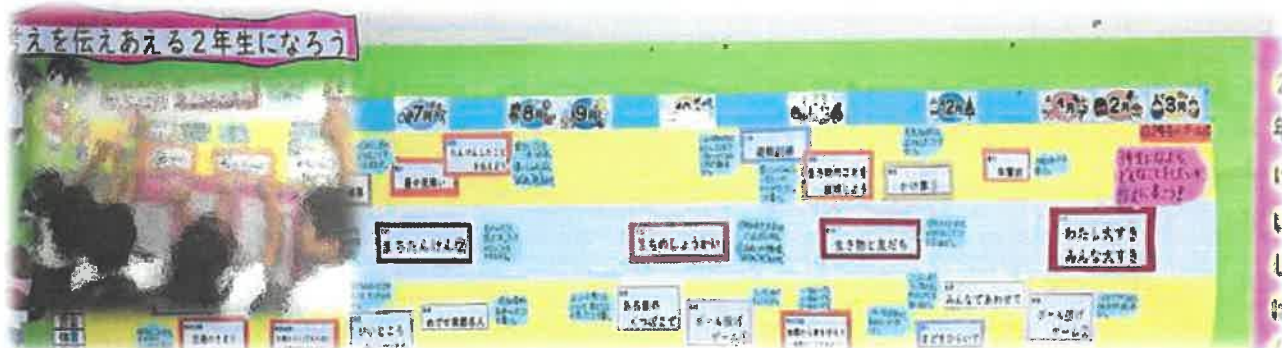
③つながりが可視化できるよう単元を枠で囲むなどすると共有しやすい。

※「単元配列表」作成後、変更したり付け足したりと、児童の成長や学びの実態に合わせて修正や加筆を行い、活用していく。

※単元導入時は、児童と共にねらいや内容を共有し、単元終了時や学期末は、児童自身の振り返りとしても活用することができる。



「単元配列表」のイメージ図(第2学年)



縦 1.5m、横 約 3m の児童とねらいの共有や振り返りで活用するための「単元配列表」 第2学年

【側面3:人的物的資源の活用の視点】 外部の人材(主事招聘)を活用し、教材研究を深め日々の授業改善へ
コンテンツ(学習内容)とコンピテンシー(資質・能力)の両輪で授業改善!

— 授業改善につなげる研究授業のながれ —



日々の授業改善につなげていく研究授業に向け、上記のながれが一つの例としてあげられます。

1. 教材研究は、学年で教材研究を深め、具体的な手立ての共通実践に向け、外部の人材(主事等)を活用し、コンテンツとコンピテンシーを意識した教材研究にしていくことが大切です。
2. 研究授業は、教師の指導改善のための評価、児童一人一人が学びを次の学びにいかすための評価の視点が大切です。そのため、個人内評価等を取り入れながら、単元を通して、また一時間の授業を通して、評価と改善を重ねていくことが、授業づくりのベースとなります。
3. 授業研究会は、話し合う視点を「学校教育目標(目指す児童像や資質・能力)」や「教科で身に付ける資質・能力の育成」の視点で良さや改善点を共有し、明日の授業改善へつなげていきましょう。
4. 研究授業で共有した視点や方法を共通実践することで、授業改善につながります。

一 学校教育目標（目指す児童像）と授業をつなげる学習指導案例 一

学習指導案に、学校教育目標（目指す児童像）や、本時のどの場面で評価をするか等を明記することで、授業改善へ向けた視点の共有を図ることにつながります。

うるまき 小学部 (第) 第○学年 ○○科学学習指導案

令和元 年 月 日 () 校時 年 地 番 授業者 共同研究者

1 単元名 「 」 (本時 / 時刻)

2 単元の目標

① ~できる。 [知識・技能]

② ~できる。 [思考力、判断力、表現力等]

③ ~しようとしている。 [学びに向かう力、人間性等]

3 単元について

(1) 教材観

(2) 児童観 (単元内容に関する視点から)

4 校内研究とのつながり

(1) テーマとのつながり

場面	児童の活動	児童の様子と評価
① 導入		
② 展開		
③ まとめ		

(2) 育成を目指す資質・能力について (資質・能力を育成、校内研究テーマ等)

(3) 評価観 (単元内容、育成を目指す資質・能力の視点から)

5 本校の学校教育目標以下目指す児童像

よく聞き、よく考え、正しく判断する子 (知)	明るく思いやりのある子 (徳)	おぼろげなくまじい子 (情)
①自分の考えと相手の考えのちがいを理解し、共通の考えを導き出すことができる。	①通年で明るく元気な声を出すことができる。	①相手の考えや感情を読みとくことができる。
②自分の考えを整理し、理由を述べることができる。	②物を大切に扱い、身の回りの整理整頓ができる。	②目標達成をめざしてがんばることができる。
③友達と協力し合い、課題を達成することができる。	③自分の立場になって考えたり、意見を述べることができる。	③正しい知識の活用をすることができる。
④目標を持って、自分から積極的に学習することができる。	④学校のきまりを守り、友達と協力して学習することができる。	④課題に挑戦し、健康・安全に学ぶことができる。

6 本単元で育みたい資質・能力の評価

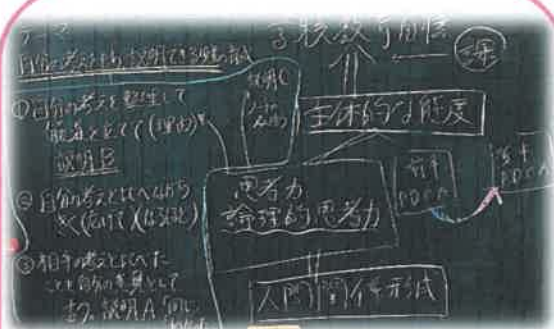
児童の姿	評価方法	評価の観点	評価の観点	評価の観点
①自分の考えをもち、理由を相手に説明することができる。また、相手の考えを聴き、自分の考えと共通の考えを導き出すことができる。	①自分の考えをもち、理由を相手に説明することができる。	①自分の考えをもち、理由を相手に説明することができる。	①自分の考えをもち、理由を相手に説明することができる。	①自分の考えをもち、理由を相手に説明することができる。

7 本単元の評価 (学習単元の評価)

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
①	①	①
②	②	②
③	③	③

論理的思考力の育成に向け、授業のどの場面で、どのような活動を意図的にを行い、児童の変容をみとるかを、校内研究テーマとのつながりの視点で明記すると、共有が図りやすい。

赤枠は「学校教育目標(目指す児童像)」と「校内研究テーマ」、「育成を目指す資質・能力」とのつながりを特に意識する項目。



全職員で話し合って作成した論理的思考力の育成に向けた評価規準

座席表を活用し、児童の実態を丁寧にみとり、次時の授業改善、個に応じた手立てに評価をつなげる

4 単元計画 (1) 単元のながれ

場面	単元・学習活動	評価観点・評価方法
1	導入	20分 ノート 分析
2	展開	20分 ノート 分析
3	まとめ	20分 ノート 分析
4	振り返り	20分 ノート 分析
5	まとめ	20分 ノート 分析

(2) 本時の展開

場面	学習活動・学習目標	育成を目指す資質・能力の育成、及びその育成	育成を目指す資質・能力の育成、及びその育成	評価観点・評価方法
導入	1 学習目標をつかむ。			
展開	2 自分で考えよう。			
まとめ	3 自分で考えよう。			
振り返り	4 ペーパー・グループ解決			
まとめ	5 まとめ			
振り返り	6 振り返り			

9 振り返り

--

○作成表：授業時の説明資料で活用 【6の評価(本単元で育みたい資質・能力)用:A・B・C】

児童	評価	評価	評価
A		A	
B		B	
C		C	

児童の変容・成長 ～「論理的思考力」の育成の視点から～

1. 全国学力・学習状況調査結果より

国語（B問題平均正答率）

	A小	全 国	平均正答率の差
平成31年	55.3	57.6	△ 1.8
平成30年	49.0	54.7	△ 5.7
平成29年	45.0	57.5	△ 12.5

国語B問題において平均正答率が、全国と比較して、記述問題、読む・書く問題において差が縮まってきています。

算数（B問題平均正答率）

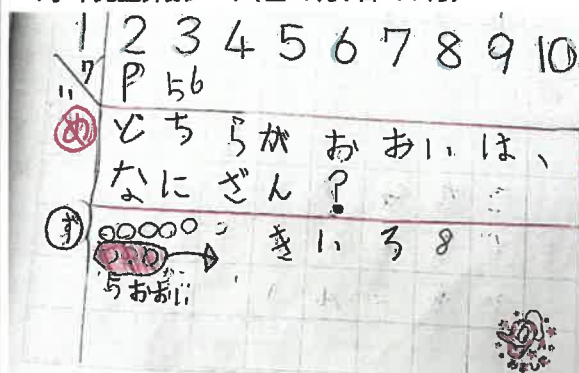
	A小	全 国	平均正答率の差
平成31年	67.0	66.6	+ 0.4
平成30年	49.0	51.5	△ 2.5
平成29年	35.0	45.9	△ 12.9

算数B問題においても、平均正答率の全国比較の差が縮まってきています。また、思考力・判断力・表現力等を問う問題においても同様の結果となっています。

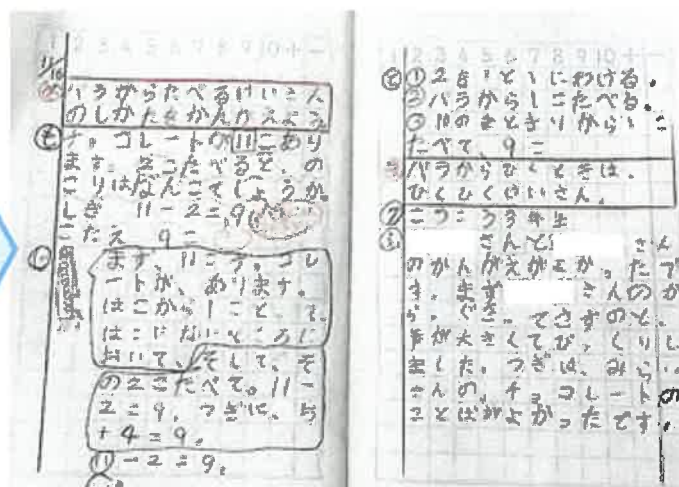
以上の調査結果からも、学校教育目標（目指す児童像）の実現に向けて、育成を目指す資質・能力を焦点化・共有化し、カリキュラム・マネジメントの視点を通じた授業改善や校内研究などの取り組みによって、児童の論理的思考力の育成につなげることができたことがうかがえます。

2. 児童ノート記述より

1学年児童算数ノート（左：7月、右：11月）

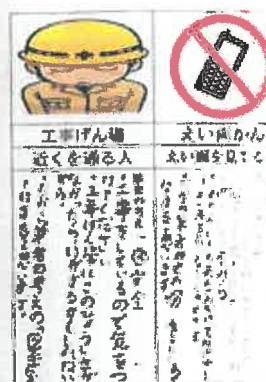
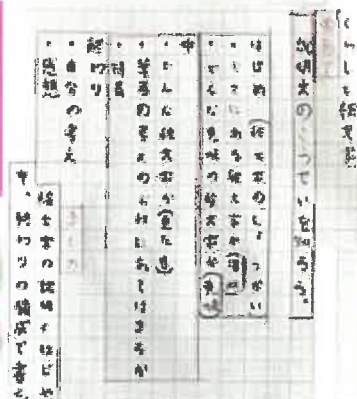


7月のノート記述は、図と答えであったのに対し11月のノートは、自分の考えを式とつなぎ言葉を用いて順序立てて説明している。



3学年児童国語ノート（説明文の単元）

教科書や資料の記述を根拠に絵文字の意味や役割を説明している。



教師の変容

1. 校内研修より（3回実施した授業研究会と校内研修「よりよい学校にするためには」の様子）



授業研究会では、話し合う視点も研修の視点も、学校教育目標・目指す児童像（論理的思考力の育成）に、目の前の児童をどう近づけるかでした。上手くいっている手立てを共有し、明日の授業や実践に生かしていくことができました。

2. 「単元配列表」を活用した1学期の振り返り（7月）と今年度最後の研究授業後の振り返り（11月）

1. 教科等横断的な視点

校内研究（研究授業・授業研究会）、日々の授業改善の意識の浸透など

説明文を取り入れた（国語科）の授業研究で、説明文とどの視点でとらえ、学年の系統性を見えた授業の存在は、とても必要だと思ふ。例えば、要点を捉える→要点をまとめる。段階に応じて、丁寧に指導して、（教科等横断的な）ある学習の姿が

2. PDCAサイクルの視点

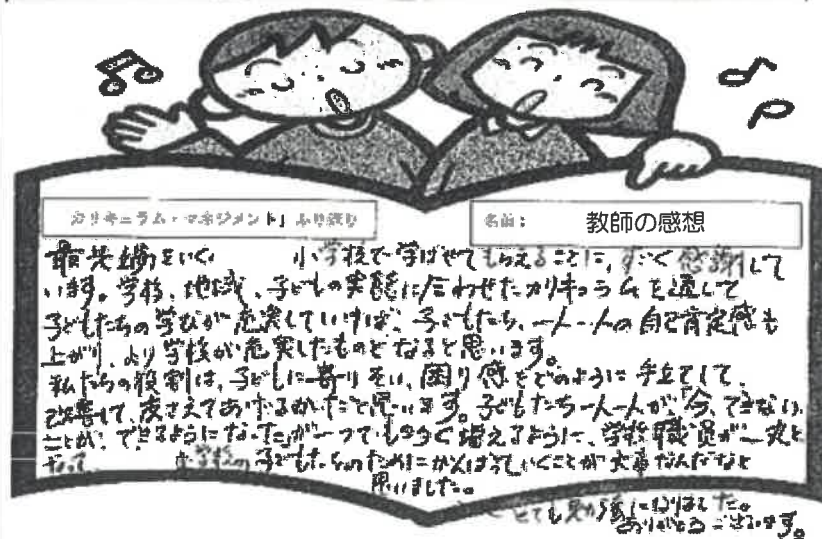
学年で共通して振り返り意識の学習にいかす。単元配列表の作成と活用など

指導要領にちか、学校・子どもたちの実態に合った、横断的な単元の果たせと先生方の勉強の場だと思ふ。手立てのタテマ、授業がうまくいった→ではなく、単元のゴールに子どもたちが取り組むことができるように、どんな視点で授業を構成したらよいかを考えていくとよいと思ふ。

3. 人的物的資源の活用

教育センターとの連携（研修研修・研究発表など）

とても貴重なことと思ふ。子どもたちにかかると、たくさん学べるので、とても嬉しいと思ふ。



教育活動の振り返りを「単元配列表」を活用し、よさや課題、改善策を付箋紙に記入し、可視化しました。そして、学年で共有することで、次学期に成果と課題をつないでいくことができました。

また、学期や年度の振り返りをカリキュラム・マネジメントの三つの側面で行うことで、実践の視点の共有を図ることができ、成果につながった手立てや改善していく取り組みが明確になりました。

基礎的・基本的な学力の向上と主体的に学び合う力の育成

～授業改善と自己肯定感を高める取り組みを通して～

学校紹介

・学級数 14 学級 ・生徒数 337 名

1981 年に既存の中学校の分離校として創設された学校である。古い建物ながら丁寧に使われ、卒業生の学校への愛着が伝わる校舎で、校庭には、ビオトープの一角にオクラレルカの花が咲いている。



オクラレルカ

学校教育目標

正しく考え 自ら学びを拓く生徒 【知育】
 こころ豊かで明るく 思いやりのある生徒 【徳育】
 健康でたくましく 安全に活動する生徒 【体育】

目指す生徒像

- ・自ら進んで学習し、正しい判断ができる生徒
- ・お互いの良さや違いを認め、協力し助け合える生徒

生徒や学校の実態

生徒一人一人の良さや可能性の伸長に向け、各部会において指導の目的や方法を共通理解したり、外部機関と連携しながら組織的に対応することで、生徒指導において一定の成果を上げている。また、家庭学習帳「夢力ノート」による家庭学習の習慣も定着しつつある。今後の取り組みとして、基礎的・基本的な知識技能の習得及び活用する力の向上が挙げられている。

今回の「カリキュラム・マネジメント」（取り組み）のねらい

数学に対する興味関心はあるが、基礎的・基本的な知識や技能、それらを活用する力や主体性に課題がある。そこで、**生徒の実態把握**と**学校教育目標**をもとに考えられる対応策を、**授業改善**を通して実践していく。特に、友達との学び合いの場において、基礎的・基本的な知識や技能を習得しながら、主体的に学ぶことで、思考力・判断力・表現力等の育成を図ることとする。

身に付けさせたい資質・能力

自己肯定感、数学の知識及び技能、思考力・判断力・表現力等

三つの側面（②PDCA サイクル、③ 人的・物的資源の活用）

PDCAサイクル （数学部会で成果と課題を共有し、対応策を考え、授業改善につなげる。）
 （アンケートの実施）

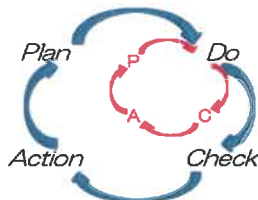
人的・物的資源の活用 （校区内の小学校と連携し、生徒の情報交換や授業参観などを実施）
 （教育センター主事による授業づくりの支援）

カリキュラム・マネジメントタイプ

生徒 授業 **教科・領域** 学級 学年 学校

1年間の流れ

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
Research	Plan	Do →	Check	Action/Plan	Do →			Check	Action	Plan	
先生方への趣旨説明	研究協力員（数学科）の 取り組み計画を立てる	授業実践①	前期までの評価と反省	9月以降の取り組みの確認	授業実践②		研究授業	今年度の成果と課題の確認	次年度に向けて 目指す生徒像等の見直し	次年度の目指す生徒像等の決定 と共通理解	4月からの取り組み準備



取り組み①

実践（Do）→ 授業改善をして、基礎的・基本的な学力の向上へ

【側面③：人的・物的資源の活用】教育センター主事による授業づくりの支援

「既習事項を掲示し、授業と放課後の学習に活用」

（概要）

基礎的・基本的な知識・技能の習得のため、**既習事項の確認**をいつでもできるような取り組みを行った。

（取り組みの**実際**）

基礎的・基本的な知識・技能を一つ一つ掲示物にした。授業では、まとめの時に復習として活用できるようにした。また、休み時間や放課後のちょっとした時間には、既習事項の確認がいつでもできるように、廊下にピンクの目隠しをめくりながら復習できるような掲示物にして貼り、遊びながら再確認できるような工夫をしている。



【ポイント】

授業で学習した後、廊下に掲示することで、今学習した内容を**すぐ復習**できる。

（取り組みの**成果**）

テスト前に既習事項の確認を行う生徒や、「これって、何だったかな？ そうそう」と言いながら、ピンクの目隠しをめくって復習をしている生徒の様子がうかがえた。

取り組み②

実践（Do）→ 自己肯定感を高める取り組みで主体的に学ぶ

【側面②：人的・物的資源の活用】校区内の小学校との連携、生徒の情報交換

「生徒同士の学び合いの場を多く設定し授業を改善」

（概要）

- ◎生徒の状況を確認するためのアンケートを実施。
- ◎分からないことを友達に質問したり、自分の考えを説明し合ったりしながら、分かるようになったり、自分の考えをさらに深められるような授業改善に取り組んだ。

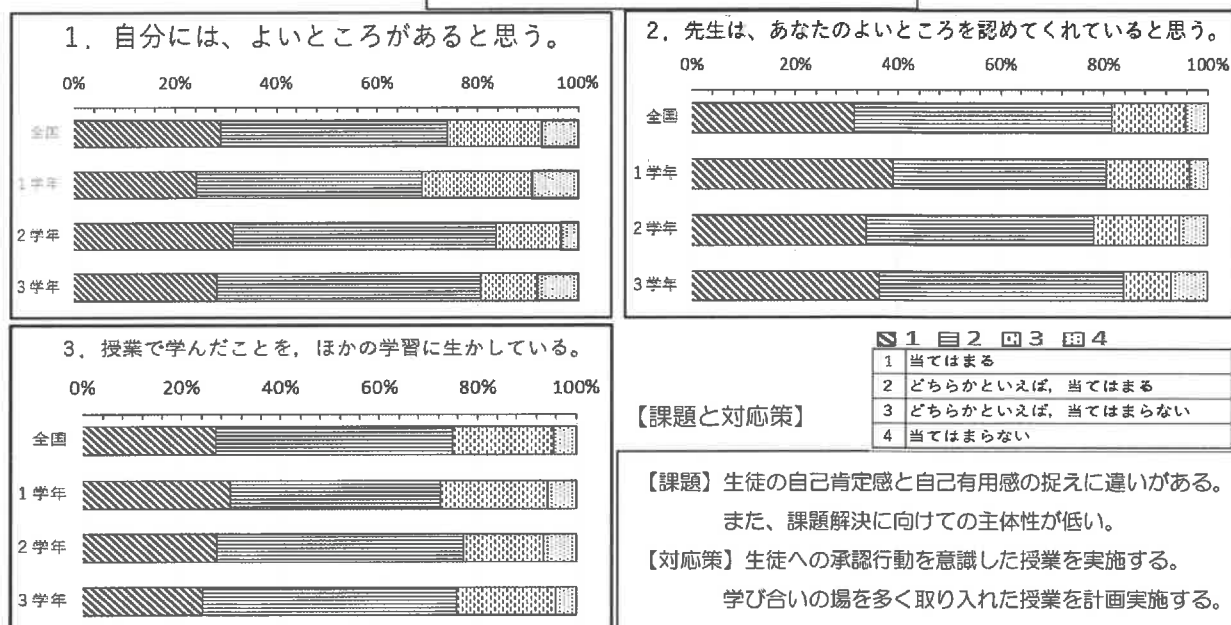
（取り組みの実際）

数学に対する興味関心、自己有用感、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取り組み状況についてのアンケートを実施し、生徒の状況を把握し、課題を発見し、対応策を考えた(資料1)。日々の授業においては、授業態度もよく、真剣に授業に取り組んでいる生徒が多い。しかしながら、学習内容が理解できず、正負の数の四則計算をはじめ、既習事項が定着していない生徒もいた。

そこで、友達との学び合いを多く設定し、友達に質問や説明等を行うことで、分かるようになったり、友達の考えを聞いたりすることでよりよい考えに気づく生徒もいた。

4月には、校区内の小学校職員と入学する生徒の情報交換をしたり、在校生の様子も4月と夏休みに情報交換したりと、生徒の様子を職員間で共有し、授業での声かけや承認行動へとつなげている。

第1回アンケート(6月実施) (資料1)



（取り組みの成果）



友達同士との学び合いを楽しみながらの学習、質問したり、教えたりしている姿



休み時間でも学び合う姿

論理的思考力の育成

～体験的、操作的な活動を取り入れた授業を通して～

学校紹介

- ・学級数 4学級
- ・生徒数 160名

沖縄県立C高等学校に併設する中高一貫教育校として、平成28年4月7日、沖縄県立C中学校を開校。

中高一貫教育校としての特性を生かした取り組みを実践。

- 学習面では、一部に高校の内容を取り入れた先取り学習や探究活動等を実施。
- 高校生と中学生が協力して実施する体育祭等の学校行事や生徒会活動。
- 年度当初の宿泊学習における仲間づくり。
- 大学・研究機関見学等を実施。



学校教育目標と目指す生徒像

高い知性と想像力、豊かな人間性を養い、県内外及び国際社会で活躍する次世代を担う人材の育成

- ① 自ら学び、深く考え、ともに高めあう知性・創造性に富む生徒を育成
- ② 豊かな人間性と高い志を有し、自己の目標に向かって努力する生徒を育成
- ③ 未来を切り拓く強い意志を有し、社会に貢献できる生徒を育成

生徒や学校の実態

中高6年間を2年ごとの3段階に分けて、生徒の発達段階に合わせた指導の充実を図っている。

今回の「カリキュラム・マネジメント」（取り組み）のねらい

数学内の異なる領域を関連付けた問題を、体験的、操作的活動を通して、学習することで、数学の奥深さと楽しさを感じながら、論理的思考力を養う。

身に付けさせたい資質・能力

- 【論理的思考力】
- ① 体験的、操作的活動を通して、意欲的に課題に取り組む生徒
 - ② 他者との交流を通し、問題解決にあたる生徒

三つの側面（②PDCA サイクル ③人的・物的資源の活用）

PDCA サイクル （授業改善に向けての校内研修や教科会、公開授業の取り組み）

人的・物的資源の活用（校内の人材活用：中高一貫教育校のよさを生かし、中学校教頭が数学の公開授業を行い、「目指す生徒像」の具現化を図るための授業を提案。また、校種や教科を超えた授業研究会や教科会等を通して、組織で「目指す生徒像」に迫る。）

カリキュラム・マネジメントタイプ

生徒 授業 教科・領域 学級 学年 学校

1年間の流れ

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
Research/Plan		Do →	Check	Action/Plan	Do →			Check	Action	Plan				
研究協力員の先生方への趣旨説明	ヒヤリング計画から実態把握と取り組みを立てる	授業実践	前期までの評価と反省	9月以降の取り組みの確認	授業実践			授業実践	今年度の成果と課題の確認	次年度に向けて目指す生徒像等の見直し	決定と共通理解	次年度の目指す生徒像等の決定	具体的共通実践事項等の決定	4月からの取り組み準備

取り組み①

実践（Do）→ 全職員が授業実践し、中高職員間で情報共有

【側面③：人的・物的資源の活用】お互いの授業を参観し、「数学便り」等での情報発信！

「まずは、情報共有から！ 公開授業の周知と授業内容の発信」

（概要）

公開授業の周知に向け、早めに日時や単元等を職員室の黒板に掲示し、職員が空き時間を利用して参観できるようにすることがポイント！（写真1）。公開授業後は、参観ができなかった職員との共有に向け、「数学便り」を発行。校種や教科を超えて、授業改善の視点も共有。また、公開授業実施クラスの生徒にも配布し、家庭との共有も図った（写真2）。数学科教諭による公開授業を通して、校種間、学校と家庭をつなげる情報共有を意識した取り組みを行った。

（取り組みの実際）

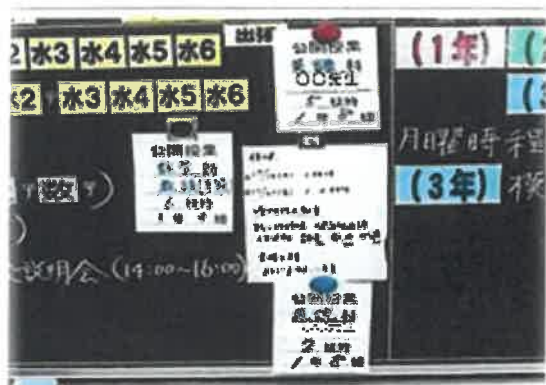


写真1 公開授業の全体職員室黒板提示

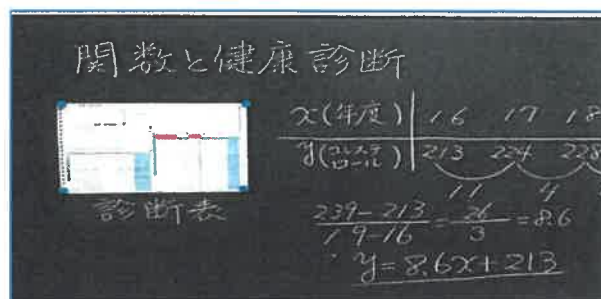


写真2 教頭による数学便りの発行



単元名「関数」

- （左）根拠を示しながら自分の考えを説明し合う生徒の様子
- （右）健康診断の結果を教材の一つにして一次関数を日常の場面へつなげている



生徒Aの授業感想

「図形、関数それぞれの領域が別物ではなく、みんな交わっていると実感した」

取り組み②

評価（Check）→ 校内研修において、授業反省と改善策の共有

【側面②：PDCA サイクル】 授業改善に向けての組織的な取り組み

「意識化と共有化で組織力の向上を図る！ 校内研修と教科会の充実が大切！」

（概要）

校内研修では、全職員が授業参観しながら記録した先生方の実践を紹介し、お互いの授業のよいところを学んだり改善策を考えたりしながら、**授業改善**に向けてベクトルを揃えることを意識した。

教科会（数学）では、それぞれの苦手な単元を確認し、**授業改善**に向けて話し合いを持った。そして、各自の課題意識に即した単元で公開授業を設定し、授業を行った。また、空き時間の先生方に気軽に参観してもらい教科の枠を超えたアドバイスから**授業改善**につなげるなどの組織的な取り組みを行った。

（取り組みの実際）



教科会で教材について話し合う様子



数学の公開授業の様子



教頭が数学の授業をしている様子



ICT 機器を活用し考え方を共有している様子

若手教員からの授業後の感想

「関数という理解しにくいものを、水やペットボトルなど身のまわりにあるものを利用し、視覚化することで、具体的なイメージで捉えることができていた。」

教頭先生の発問や動きに対し、生徒が一つひとつに集中していることが見て取れた。また、説明する場面では多くの生徒が深くうなずきながら聞いており授業に引き込まれていた。本時の授業の生徒たちの様子から感じたことは、数学的な技能など生徒に身につけさせなければならない力はたくさんあると思うが、それだけでなく、興味をそそる題材や方法、生徒とのやりとりや言葉選びなどその他にも重要なことがたくさんあると強く感じた授業であった。

自分自身も数学の楽しさを感じさせることを前提とした授業を展開していきたいと再認識することができた。」

気軽にお互いの授業を見合い、よさを共有したり、課題の改善策を話し合ったりすることで授業を見る視点に広がりが出て、授業改善へつながっている。内部の人材を活用し、教科会や校内研修を充実していくことで教科や校種の枠を超え、組織的に学校教育目標・目指す生徒像の育成を図ることができる。

公開授業を終え教科会での授業者の感想

生徒指導のカリマネから目指す学校教育目標実現への取り組み ～アンケート調査を活用したPDCAサイクルを通して～

学校紹介

- ・学級数：18学級
- ・生徒数：720人
- ・学校の特色：沖縄本島中部の新興住宅地の高台にある風光明媚で閑静な環境にあり、今年で創立42年目を迎える。各学年に特別進学クラスを1クラス設置し、情報化社会への対応として、基礎知識や技能を習得するためワープロ検定や情報処理検定等も実施し、多くの生徒が挑戦している。



学校教育目標（重点目標・目指す生徒像）

- ・個々の生徒の実態を的確に把握し、その個性・能力を可能な限り開発するとともに民主的で文化的な社会を築きあげる連帯と協力の精神を身につけさせる。
- ・基礎的な学力の充実に努めるとともに、自ら課題を発見し解決する意欲的な学習態度を育成する。

生徒や学校の実態

- ・素直で優しい生徒が多く、学校や教員を信頼しており、挨拶などのマナーが身につけてきている。

今回の「カリキュラム・マネジメント」（取り組み）のねらい

教師個々の生徒への関わり方の変容を通して生徒指導の全校体制を図り、学校教育目標の具現化を目指す。また、生徒が自ら学校生活を振り返り改善を目指すことにより、教師と一体となった取り組みにする。

身に付けさせたい力（資質・能力）

自身の行動への適切な判断力（自己指導力）の育成と学習や諸活動への取り組みに対する意欲向上

三つの側面

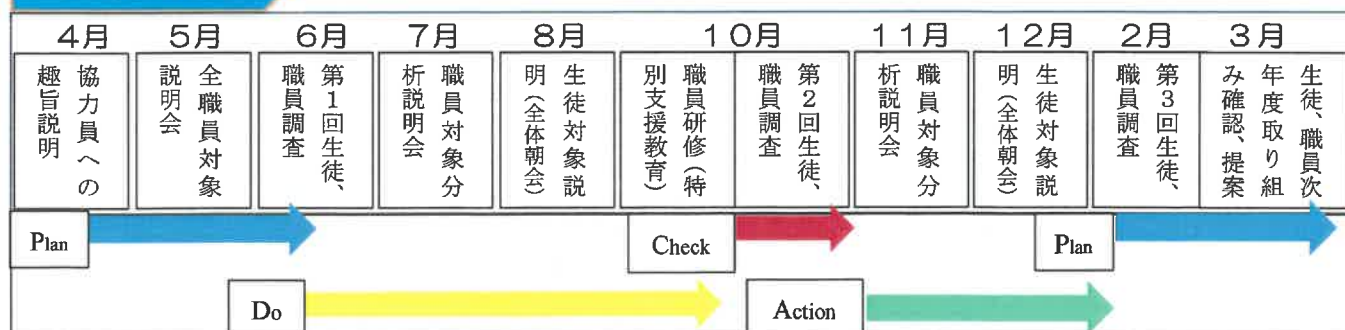
PDCA サイクル（定期的な調査を通して、実態把握や取り組みの評価、見直しを行う）

人的・物的資源の活用（教育センター主事招聘による職員研修及び生徒対象講話の実施）

カリキュラム・マネジメントタイプ

生徒 授業 教科・領域 学級 学年 学校

1年間の流れ



取り組み①

「共通理解が成功の鍵！ゴールを確認し取り組みの第一歩を踏み出す」

（概要）

「何の目的で取り組みを行うのか」、「結果として何が得られるのか」、「現場への負担はあるのかないのか」…多忙を極める学校現場で新たな取り組みを行うことは様々な決断や覚悟が必要です。

「生徒のために…」だけではなかなか動き出せないのが現状。明確なビジョンを示し、疑問点を解消し、多忙感を感じずにそして全員で同じゴールを目指し歩き出せるかが最も大切なことです。



一体何をどうすれば…

生徒の思いを受け止め、一人一人が生徒指導の問題に方向性を一つ（P）にして取り組み（D）、検証し（C）、改善（A）していけば…。つまり、**生徒指導のPDCA**を回すことで生徒も職員もいきいきとした学校に。

まずは、「生徒との関わり方を少しだけ変えてみよう」という気持ちを持つだけでいいんです。

取り組み②

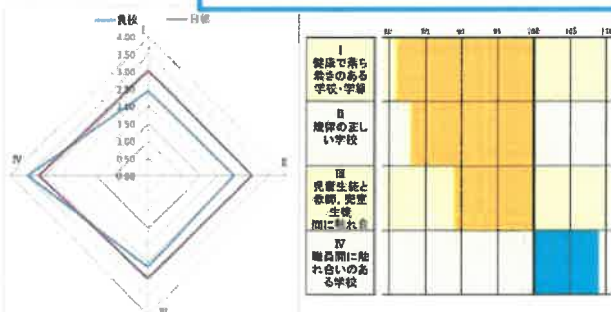
「生徒、職員アンケートで実態把握と取り組みの具体策を浮き彫りに」

（概要）

教員に対し、「生徒指導に関する調査」を実施し、**生徒指導の機能状態**（自己存在感を与える場の創出、自己決定する機会の提供、共感的人間関係の構築）の全体像を客観的な**データ分析**を通して確認し、**生徒指導の実態把握**を行う。また、機能状態の因子に対する「教師の働きかけの状態」の項目から対応策および学年、学校の課題を明確にし、全校体制での取り組みにつなげる。

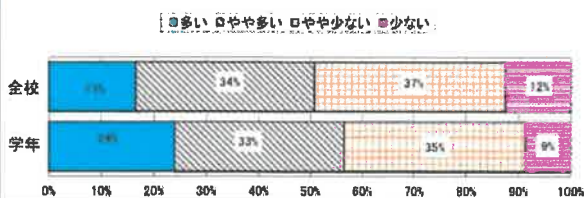
生徒に対しては、「意欲調査」と「高校生活チェックシート」を実施し、**学校生活に意欲的に取り組める状態になることを目指す**とともに、生徒自身の高校生活での積極的な態度について**考えさせ改善する機会**とする。

生徒指導は機能状態にあるのか？



「生徒の意欲調査」全校と学年の比較

Q1 あなたは最近、やる気（意欲）をもってものごとに取り組むことが多いですか。



学年間比較で「やる気」の落ち込みを見逃さない！

「教育活動全体に機能する生徒指導の在り方『パワーアップシート』を活用したやる気を引き出す生徒指導」（秋田県総合教育センタープロジェクト研究）を参考

取り組み③

「『学校生活チェックシート』で主体的に学校生活を変える！」

(概要)

学校生活の楽しさや充実感とは与えられるものではなく、一人一人がルールを守り、仲間のことを大切に思い、目標を持って過ごすことによって手にするもの。生徒自身も、**高校生としての学校生活の過ごし方を考え(P)、行動し(D)、評価し(C)、改善(A)していくことが大切です。**そのヒントになるのが『学校生活チェックシート』。学期ごとの取り組みとして定期的に自己を振り返ることで日々の生活が変わってきます。



生徒各自で自己診断

学校・学年の傾向、改善点を全体で確認し新学期へ突入！

学校生活チェックシート				
	1	2	3	4
1 学校のきまり(校則等)を守っている				
2 欠席、遅刻、早退をしないようにしている				
3 体育館での集会には遅れないように移動し、きちんと整列している				
4 学校に授業に関係のないものは持っていない				

学級ごとで個人個人の新たな目標を確認



取り組み④

「『開発的生徒指導』の取り組みで足並みを揃える」

(概要)

生徒の発達を促す援助としての「開発的生徒指導」は**問題行動の予防**だけでなく、**個性・自尊感情・社会的スキルの伸長**が期待できます。教員が同じ尺度で定期的に自らの生徒との関わり方を振り返り、同時にチェック項目を共有することで生徒指導の**ベクトルを一つ**にして取り組みを進めていくことができます。

チェックシート

(1) 【生徒指導が機能するための教師の働きかけの状態】
以下の各項目について、個人として、あるいは学校全体としてどれくらいあてはまると思うかを答えてください。
「1:全くしない 2:あまりしない 3:だいたいする 4:いつもする」(各項目、1つずつマーク)

	1	2	3	4
1 生徒に一日一回は声をかけている				
2 生徒を認める場面を意図的に設定している				
3 生徒一人一人のよさや可能性を把握している				
4 生徒の心の動きを丁寧に見ている				
5 指導の中で、優しさと厳しさを伝えている				

揃える指標
ベクトルを

教師の働きかけの状態を問う 32 項目

生徒指導が機能するためのポイントである教師の働きかけについて診断します。

セルフチェックの様子



因子Ⅰ：良好な関係作り
因子Ⅱ：指導方針の共通理解
因子Ⅲ：問題行動への予防・初期対応
因子Ⅳ：生徒に対する相談・援助

取り組み⑤

「校内研修を通して適切な生徒への関わり方の共通認識を」

（概要）

学習に、他者との関わり方に、学校生活全般に困り感を抱えた生徒は、自信を失い、意欲を失い、不登校傾向を示したり、問題行動へ関わる危険性が高まります。教師の側が適切な寄り添い方を知ること
で生徒の変容が期待できます。特別支援教育の研究を行う教育センターの主事との連携（外部資源の活用）による校内研修の実施で、生徒理解が進み、生徒にとって居心地のよい環境が築かれていきます。

〈テーマ〉
発達障害のある生徒の支援
ー理解から支援へー



（校内研修）



“適切な生徒対応について
有効な情報を提供”



生徒一人一人の個性を見直すことが関わり方を変えるきっかけに！

取り組み⑥

「取り組みへの理解を促し、生徒の考えを改善につなげる」

（概要）

取り組み自体も検証と改善

どんなに有効であると思われる取り組みであっても、対象となる生徒、職員の声を反映し改善を加えていかなければその有効性に“？”がついてしまうものです。生徒や職員がアンケートや自己診断に真摯に向き合い、全校体制での取り組みであるという意識が持てるかが大切で、取り組みの途中で立ち止まり、声を聴き、反映させていくことが成功の鍵を握ります。

（取り組みの実際）

生徒会役員に対し、今回の取り組みへの期待と課題などについて話を聴き、第2回の調査結果分析説明会でその思いを結果とともに職員に伝え、第3回での改善点を確認した。

生徒が意欲的になるように先生たちも取り組んでいることを伝えた方がいい。



どの調査もじっくり時間をかけて考え、答えられるようにするといい。



全体での取り組みで学校が変わっていくことはいいことです。



「自治の力」を身に付ける、学校教育全体をつなげるカリマネ ～生徒主体の学校行事を創り上げる取り組みを通して～

学校紹介

風光明媚な場所に位置し、豊かな自然と広大な敷地の環境の整った高校である。1 学年 7 クラス、全 21 学級、生徒総数 829 名の中規模校で、ダンス部など部活動が盛んで、身体能力に長けている生徒が多い。



学校教育目標

憲法や教育基本法に則り、創造的で知性・協調性に富む豊かな人間性をはぐくむとともに、確かな判断力を身に付け、時代の変化にも柔軟に対応しうるバランスの取れた心身ともに健康な人材の育成。

生徒の実態

学校行事を2年に1度のローテーションに変えて、2回目の「E 高祭（学園祭）」である。前年度行った体育祭で培ったリーダー性や、企画・立案・運営の力が、今度は、各学級においても発揮できるかどうか課題である。前年度の行事と今年度の行事をPDCA サイクルでつなぎ、生徒主体の E 高祭に取り組む。

今回の「カリキュラム・マネジメント」（取り組み）のねらい

学校全体のカリマネ！ 行事で GO！

必ずやってくる学校行事！

学校行事を2年に1度のローテーションに変え、前年度の学校行事で培った生徒のリーダー性や企画・立案・運営などの力を途切れさせずPDCA サイクルを回し、次年度の行事つなげ、学校行事に取り組む。そして、生徒の活動の「質の向上」を図りながら自治の力を育て、学校の教育目標の実現に向けて取り組む。

三つの側面

PDCA サイクル （前年度の生徒主体の体育祭の総括と改善を行い、今年度の E 高祭につなげる）

人的物的資源の活用（地域の伝統行事とのつながり〔体育祭〕）

（他県の高校で行われている学校行事の映像や写真を活用した研修会）

カリキュラム・マネジメントタイプ

生徒 授業 教科・領域 学級 学年 学校

「自治の力」を育てる学校行事「体育祭」！

学校行事を生徒主体の活動の場とすることで、行事に積極的に参加する態度を養うだけでなく、「企画・立案・運営・総括」する力を育成する。さらに、行事づくりの際に、問題が発生した時の解決能力、解決に至るまでの協働的な対話と試行錯誤を繰り返す重要性、解決した時の達成感など、非日常の活動でしか体得できない学びの場を設定する。それらの活動において、総合的に「自治の力」を育てる。この理念をもとに第12回体育祭が「挑戦、巻き起こせ感動の嵐を たぎらせるE高魂を平成最後の体育祭」をテーマのもと、生徒主体で開催された。



第12回 体育祭テーマ

すべてのクラスを3つの団に分けて行った「団演技」では、組体操を主体として自分の団の特色を表現した。また全校生徒で行った「天空彩」では、地元で行われている一年間の文化行事を体全体で表現するなど、生徒の思いがこもった体育祭となった。



獅子舞



団演技による応援合戦



ハーリー



大綱引



エイサー



護佐丸と阿麻和利

1年間の流れ

行事に向けた取り組みの流れ

前年9月・・・今年5月・・・6月・・・7月・・・9月・・・11月・・・次年9月

「E高祭」に向けての集会
(校長講話①)

各クラスの出し物について検討及び調整

リーダー研修
「E高祭のテーマ」校長講話②

・県外高校視察
・「E高祭準備・本番」

団演技や全校生徒が演技する「天空彩」を取り入れた生徒主体の「体育祭」

次年度「体育祭」に向け、県外高校視察の報告会（全校生徒向け）

次年度「体育祭」

取り組み①

校長講話！ 行事って面白い！

これなら
できそう！

体育館で全校生徒を対象に、校長先生が直接、学校行事（学園祭）についての説明を行った。

校長先生は、校長としての思い（「**自治の力を育てたい**」）を踏まえ、行事の意義や、目指す生徒像を語った。

昨年、体育祭をビデオで紹介したのと同様、今年も具体的にイメージできるように、県外での複数高校の文化祭の様子をビデオ映像を交えながら、解説を行った。また E 高祭を実現するため必要な理念や取り組みについて講話を行った。

やってみ
たい！！



校長講話①（体育館）

取り組み②

リーダー研修で思いを創れ！

本校では毎年、リーダー研修（7月中旬）で、行事のテーマを決定している。糸満青少年の家に1泊し、リーダー研修の2日目に、行事についての研修を行った。

校長講話の中で、昨年に行った体育祭を振り返った。その後、E 高祭のテーマをリーダーたちで議論・検討・吟味し、**合意形成のもと、「ハイサイ！開催！令和最初 百花繚乱に輝け E 高祭！～最高な仲間とアオハルを～」**とし、後日、合同実行委員会で決定した。

生徒の思いと、学校への思いが表現された素晴らしいテーマとなった。その後は、各HRについての出し物についてグループ分けし、その内容が検討された。



合意形成を図る様子

取り組み③

E 高祭

ひゃっかりようらん

☆≡ いざ本番！「百花繚乱に輝け！」



舞台の部



屋外演舞（エイサー）



展示の部



屋外でのダンス演技



バザーの部



展示の部（プラネタリウム）

「体育祭」「E 高祭」が生徒に育んだもの

2年間の行事の取り組みでは、校長先生が、カリキュラム・マネジメントの視点を持って「**自治の力を身に付けさせた**い」というはっきりとした資質・能力のビジョンを示したことで、「何をするのか」「どう取り組むのか」が明確になりました。

そして、前年の体育祭と今年の学園祭の企画段階で、**行事に関する**ビデオや写真等を見せることで、「何をすればよいのか」「どこまで達成すればよいのか」をイメージしやすくなり、生徒全体の合意形成や主体的な活動を促しやすかったのではないのでしょうか。

また、この取り組みを通して印象的だったのは、リーダーとなる生徒が多く育ったことです。行事で培った力をその次の行事につなげ、先輩から後輩へと生徒の自治の力が文化として受け継がれている様子がうかがえました。学校全体の一体感が感じられる象徴として、現在、校舎内の階段に「**チームE高**」と書かれた文字が貼られています。これは、前年度の体育祭の後に行われた別の行事において、生徒から発せられたキャッチフレーズです。



「チームE高」の文字

今回の取り組みでは、校長先生が、カリキュラム・マネジメントの視点を持って、**育成したい資質・能力**のビジョンを明確に示しています。その上で、学校教育目標の実現に向けて、学校行事の意義や目指す生徒像を伝えながら、生徒主体の学校行事を創り上げていく取り組みを行い、生徒の資質・能力の育成につなげていく様子がうかがえました。

ようこそ E 高祭へ！！

生徒実行委員長あいさつ（抜粋）

「ハイサイ！開催！令和最初 百花繚乱に輝けE 高祭！～最高な仲間とアオハルを～」

様々な花が咲き乱れるように、**E 高生一人一人が持つ個性を大いに発揮してほしいとの期待を込め**、このテーマに設定しました。

私たちE 高生は、来校されるすべての皆様を迎えるべく総力を挙げて準備してきました。（中略）それでは、前回とはまたひと味違う、魅力あふれる“第13回E 高祭”を存分にお楽しみください。

校長あいさつ（抜粋）

“**行事**”は、**学校生活の中に“潤い”と“感動”をもたらしてくれます**。しかし、それは仲間と議論を重ね、時にはぶつかり、そして協力し、みんなの力で創意工夫し、創造する過程を通して味わえるものなのです。昨年の『第12回E 高体育祭』において、初めて生徒の自治の力で取り組んだ『団演技』や、あの極めて難易度の高い集団演技『天空彩』の完成に頑張ってくれた生徒の皆さんの姿の中にそれを見ることができました。そして、そこには本校の先生方が使い続けてきたスローガンである『**目指せ伸び率 No 1！**』が現実に向けて動いている姿もうかがえました。（中略）

今年からE 高は、新たなスローガンである『**E 高は、三兎を追う！**』の実現を目指しています。三兎とは『**学業**』『**部活**』そして**行事**を表しています。特に行事は、『**学業を通して手に入れた知識・知性**』や『**部活**』を通して培った**チームワーク**などを総動員して、異なる個性を持つ仲間が“**異質協同**”の精神で体育祭や学園祭など、大きなプロジェクトを作り上げることに意味があり、三者が渾然一体となって成立するものと理解しています。そして、それがそのまま**社会に出てからの実践力や企画力**につながります。だから『**行事**』が大切なのです。ただ、やらされる行事では意味がありません。今年のE 高祭では、生徒実行員の役割を強化しました。彼らが中心となって企画した新たな取り組みにも期待してください。

カリマネを軸とした学校教育目標実現へ向けた取り組み

～海外研修旅行における自主研修プランづくりを通して～

学校紹介

流通ビジネス科、OA経理科、
情報ビジネス科の3学科4クラス、
H高等支援学校には産業科1クラス



H高等支援学校との共生教育の推進に力を入れており、生徒会活動や学校行事、部活動等の全部または、一部を合同で行っている。外部との連携を通じた実践的、体験的な学習を積極的に行い、生徒のコミュニケーション力や自己表現力の向上につながっている。

3月には、**初めての海外研修旅行（台湾）**も予定されており、特色ある教育活動の一つとして重視されている。

【学校教育目標】

日本国憲法並びに教育基本法に基づき、人格の完成を目指すとともに、豊かな教養とビジネスに関する基礎的・基本的な知識・技術の定着を図り、平和的な国家及び社会の形成者として、社会の発展に貢献できる国際的視野に立ったビジネスパーソンを育成する。

【身に付けさせたい力】

- ・基本的な生活習慣を確立し、自分の強みを知り、磨き開拓する力。
- ・「学び方」の獲得。生涯学び続けていく姿勢を身に付ける。

今回の「カリキュラム・マネジメント」（取り組み）のねらい

「自分の強みを知り、磨き開拓する力」の育成

海外研修旅行（特別活動）を柱とした生徒のカリキュラム・マネジメントを通して、「主体的に学習に取り組む」ための授業の計画及び実施が、組織的、計画的に展開できるようにしていく。

三つの側面

教科等横断的な視点（海外研修旅行を基軸にした授業計画作成）

PDCAサイクル（生徒による自主研修プラン《F商B&Sプラン》の作成）

人的・物的資源の活用（外部講師による校内研修、税関職員による輸出入審査に関する生徒への注意喚起）

カリキュラム・マネジメントタイプ

生徒 授業 教科・領域 学級 学年 学校

1 年間の流れ

	4～6月	7～9月	10～12月	1～2月	3月
	事前指導			実施	事後指導
生徒	外部人材の活用 卒業生講話 ガイダンス	【Research】 パネルディスカッション（取り組み②）	【Plan】 自主研修プラン作り（取り組み②）	教科等横断 中国語講座 英会話講座 【DO・Check】	【Action】 レポート作成 成果報告会
教科	外部人材の活用 実態調査 海外研修旅行委員会の発足	外部人材の活用 カリキュラム・マネジメント研修（取り組み①） 海外研修旅行プログラムの作成	教科等横断 外部人材活用 中国語及び外国語指導	海外研修旅行	教科等横断 レポート指導

取り組み①

「社会の発展に貢献できる国際的な視野に立ったビジネスパーソンを育てるために ～カリキュラム・マネジメントの視点を通して～」

（概要）

「学校教育目標」「育てたい生徒像」の実現に向けて、特色ある教育内容にしていくためには、どのような視点が必要かなどの職員一人一人の気づきが必要であった。そこで、学校教育目標の基底となる箇所を実現するためにはどうすればよいかについて、カリキュラム・マネジメントの3つの側面（教科等横断的な視点、PDCAサイクル、人的・物的資源の活用）から考えるワークショップを行った。

それぞれの先生方が考えたアイデアを共有した上で、学校教育目標の実現に向けて、どのような取り組みが有効か、どのような教育課程を編成すべきかなどについて共通理解を図った。

【取り組みの実際】



講義

総合教育センターの主宰によるカリキュラム・マネジメントの3つの側面に関する内容や取り組み際の留意点などの説明。



ブレインライティング（個人）

①テーマを確認→②シートの一冊上の列3マスにテーマに沿ったアイデア（取り組み等）を記入→③3分たったら左の人にシートを回す→自分のシートが帰ってくるまで繰り返す→これは、いいと思ったものを○で囲む。



ブレインライティング（グループでシェア）

○で囲まれたアイデアについて一人で説明を行い、自校の教育活動の中どの様に取り入れることができるか話し合い、まとめる。



ブレインライティング（全体でシェア）

ブレインライティング実施後、各グループでまとめたアイデアを、全体の場で発表した。その後、「どのような取り組みが自校の『身につけさせたい力』に効果的か」、「魅力ある取り組みにするには、どのように教育課程を編成すべきか」などについて話し合い、取り組むべき内容の可視化と共通理解を図った。

《ある先生の声・・・》

「3つの側面で分けると、今までの取り組みで足りないものが見えてきた」

取り組み②

「楽しみながら考える！ F商B&Sプラン（自主研修プラン）づくりで Research-PDCA サイクルを回す」

（概要）

F商B&Sプランは、生徒自ら考えた研修旅行プランに台湾の大学生（Brother & Sister）がサポート役として同行し、様々な台湾を体感できる街歩きプランである。

このプランづくりを通した学習活動を【事前学習】【実施】【事後学習】の基本フェーズに分け、Research-PDCA サイクルの場面を設定し、各フェーズごとに、自己調整を行い、自らの成長や成果を評価していく。

【取り組みの実際】

事前学習（Research-Plan）

情報の収集Ⅰ

（R）

（外部人材の活用）
グローバルリーダー
研修に参加した先輩
の講話や税関職員に
よる輸出入審査（偽
ブランド品、コピー
等）に関する注意喚
起

情報の収集Ⅱ

（R）

（パネルディスカッション）
台湾のオープンデータか
ら情報を収集し、各自が
設定したテーマ（衣・食・
住・環境・文化・政治・経
済等）ごとに内容をまと
め、知識の共有と表現技
法の習得をする

自主研修プランの作成

（P）

- ・テーマに沿った自分の興
味関心や相手の興味関心を
考慮した具体的なミッシ
ョンの設定（テーマの設定）
- ・課題解決に向けた行動プ
ランを考える（個人→班）
- ・課題解決に向けた行動プ
ランを全体で共有



実施（Do-Check）

・自主研修プランの実施（D）

自主研修プランの実施を行い、各グループ
のプランの内容について気づいた事を記録
する。

・振り返り（評価）（C）

自主研修プランの実施における自身の行
動のプロセスを振り返り、自己評価を行
う。

また、教師の評価の観点としては、多様
な視点を持てているか、自らの学びを俯瞰
することができているか等を見取る。

事後学習（Action）

（１）生徒による自己評価	（２）感想文（自由記述）
課題を解決するために努力 することができたか	具体的にどのような努を行っ たか
課題解決に向けて、計画ど おりに実行することができ たか	計画どおりに実行できた理由、 できなかった理由
課題解決に向けて、ミッ ションを解決することがで きたか	ミッションの解決するまでに どのような方策があったか、 また、どのような問題があり、 克服したか
課題を解決するための計画 やミッションに対してお互 いに協力し合いながら行 うことができたか	どのようなことに気をつけな がら協力したか
課題解決に向けて、様々 なコミュニケーションの手段 を活用し、情報を収集す ることができたか	積極的に話しかけること によって感じたこと

体験レポートの作成及び成果報告会による知の共有と成長の確認（A）

体験レポートを、プレゼンテーションの内容にまとめ、やりっぱなしで終わることがないよう、知の共有を行う

「実行機能※アンケート」を活用した授業改善のカリマネ

～軽度知的障害のある生徒が主体的に取り組む力を育成するための研究を通して～

※実行機能とは目的をもって物事を達成するための能力のこと

学校紹介

- ・学級数：15クラス
- ・生徒数：133人
- ・学校の特色：軽度知的障害のある生徒が在籍し、職業的・社会的な自立を目指し職業教育を行っている。

学校教育目標（重点目標・目指す生徒像）

生徒一人一人の特性等を最大限に発揮させ、将来の職業的・社会的自立を図り、働く喜びと誇りを持ち自他ともに敬愛する心豊かな人間の育成を目指す。

生徒や学校の実態

- 実技のスキルを身につけることが比較的得意
- 実行機能に課題のある生徒が多い



今回の「カリキュラム・マネジメント」（取り組み）のねらい

全職員が校長の学校経営ビジョンを共有し、実行機能の面から生徒の実態を捉え、授業改善を学校全体で組織的に行うことによって、学校内に生徒、職員が共に学び合う文化を醸成し、教職員が授業力を高め、お互いに信頼し合い尊重し合う関係を築く。

三つの側面

- 教科等横断的な視点（全校でのメモ活用方法の指導）
- PDCA サイクル（実行機能アンケートによる実態把握）
（全職員による授業のUD化チェック）
- 人的・物的資源の活用（外部講師による校内研修）
（近隣自治会等との連携）

カリキュラム・マネジメントタイプ

生徒 **授業** 教科・領域 学級 学年 **学校**



流通サービスコース（お菓子製造）の授業の様子

1年間の流れ

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
実行機能の研修会	カリ・マネアンケートの実施	生徒の実行機能調査	メモの書き方の指導と特性に合った活用	グループ研中間発表	授業チェックの研修	ワーキングメモリと支援方法の研修会（外部講師招聘）	ユニバーサルデザインや生徒個々の実行機能に配慮した工夫授業改善と授業研究	カリ・マネアンケート2回目実施	指定研究報告会	研究のまとめ
										カリ・マネの報告会



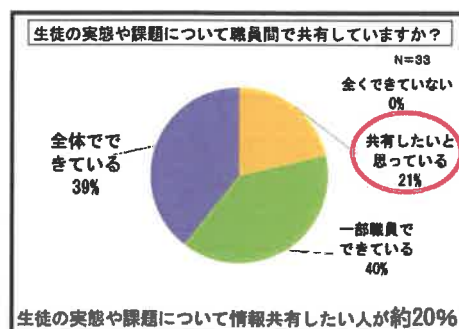
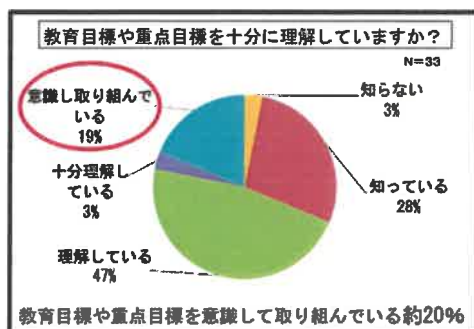
取り組み①

「全職員への『カリ・マネ アンケート』の実施とフィードバック」

（概要）

教員や寄宿舎指導員に対し、カリキュラム・マネジメント、校内連携や授業改善の取り組み、教師自身の主体的に学び続ける力についてのアンケートを行った。その結果について全職員対象の校内研修においてフィードバックを行った。

（取り組みの実際） 校内におけるいくつかの課題が明らかになり、全職員で共有することができた。



取り組み②

「生徒の実行機能のアンケート調査」

（概要）

生徒の実行機能の特徴や、生徒一人一人の強みと弱みを把握するため、「実行機能」に関するアンケート調査を昨年に引き続き行った。その結果より学校全体の取り組みとして、授業の中で課題解決に重点を置いた指導、支援方法を工夫する授業改善が行われた。

（取り組みの実際）

- アンケート結果より、実行の機能の強い項目、弱い項目は生徒一人一人異なるが、全ての生徒に共通する弱い項目（手助けを必要としていること）としていくつかの実行機能があることがわかった。
- 個々のアンケート結果より、生徒一人一人と、その生徒に関わる職員に個別のアンケート分析結果をフィードバックし、その結果を基に、生徒個々の指導・支援方法の工夫改善を行った。
- 実行機能に配慮した授業改善として、ワーキングメモリを考慮した授業のユニバーサルデザインを取り入れ、授業を行った。
- 全校でメモ活用方法の指導を行い、生徒個々の実態に合ったメモの取り方についての工夫、改善を行った。

じつこうきのう かん ちょうさ せいとう
「実行機能」に関するアンケート調査（生徒用）実施日 6/

（はじめに）
これから行うアンケートは「実行機能」を調査するためのものです。「実行機能」とは、自分がやりたいこと、やらなくてはいけないこと、困ったことなどがあつた時に、自分にとってよりうまくいくように考えたり、行動するために必要な力です。「実行機能」にはたくさんの力が含まれていますが、今回は代表的な力（10項目）について、下記のチェックシートに詳細をしてもらいたいと思います。各質問を読んで、当てはまる番号（5、4、3、2、1）に○印をつけて下さい。

ぜんたくなく するじ せつめい
選択する数字の説明

5・・・どんなことにも自分一人で工夫してできる	自分一人で工夫してできる
4・・・自分一人でもできることもある	自分一人でできることもある
3・・・先生や友達に少し手伝わってもらえればできる	少し手伝わってもらえればできる
2・・・先生や友達に多く手伝わってもらえればできる	多く手伝わってもらえればできる
1・・・先生や友達に手伝わってもらってもできない	手伝わってもらってもできない

1. プランニング（計画）	○実現できる計画が立てられる。	5	4	3	2	1
2. 優先順位	○やることがたくさんある時に、先にやったほうがいいのかを考え、大切なことからやれる。	5	4	3	2	1

「実行機能」に関するアンケート（一部抜粋）

第Ⅲ章 Q&A編

カリキュラム・マネジメントに対する疑問や課題について、Q&Aの形で整理しました。



Q1 カリキュラム・マネジメントを、何から始めたらいいですか？

カリキュラム・マネジメントの目的は、学校教育目標の実現です。ですので、学校教育目標を具体的に示し共有することが大切です。

「どのような児童・生徒を育てたいのか」「どのような資質・能力を育成したいのか」、教職員同士で話し合い、具体的な児童・生徒像を共有化することを出発点にしてみてもいいでしょう。

また、何から始めたらよいか分からない時には、学校が抱える課題を明確化することも有効です。課題を明確化することで、解決に向けて何に取り組むべきかを考えることができます。

ただし、課題解決に取り組む際には、取り組むべき課題を焦点化することも必要です。あれもこれもと考えず、できることから始めることで、各学校の教育活動の質の向上に向けての第一歩を進めることができるでしょう。



Q2 カリキュラム・マネジメントを推進する上でのポイントは？

カリキュラム・マネジメントを推進させるには、初めから完璧を目指さず、まずはできる範囲からやってみましょう。

カリキュラム・マネジメントとは、大幅な学校改革を目指す取り組みだけを意味するのではなく、日々の授業づくりや学級経営、学年経営や学校経営など、各学校の教育活動の質の向上に向けたあらゆる取り組みのことです。唯一絶対のカリキュラム・マネジメントの姿はなく、学校の実態や取り組み方によってその姿は多種多様です。

また、カリキュラム・マネジメントの視点で、自校の教育活動や経営活動の全体を捉え直してみてもいいでしょう。今ある自校の良さや強みを見つけ、その長所をどのように生かせるかについて考えてみましょう。そして、その長所を学校全体の取り組みとして共有化することで、各学校の教育活動の質の向上につなげることができます。



Q3 他の教科と、どのように関連させたり、協働したりすればいいのですか？

教科等横断的な視点で学習計画を立てる際には、ただ単に各教科・領域等をつなげるのではなく、学校教育目標を実現するために必要な関連付けや横断とはどのようなものかという視点が大切です。また、新学習指導要領では、「教科等を越えたすべての学習の基盤として育まれ活用される資質・能力」や「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」について、教科等横断的な視点に立って育成することが求められています。

まず、何のために教科等横断をさせるのかを明確化しましょう。その上で、「育てたい資質・能力」や「学習内容」など、つなげたい観点を設定し関連させていきましょう。

また、各教科の専門性の違いはあるものの、新学習指導要領で求められている主体的・対話的で深い学びの授業改善の視点は同じですので、日常的な授業公開や教科の枠組みを越えた授業改善のための校内研修などは、互いの授業内容の理解はもちろんのこと、学校全体で取り組む授業改善においても有効です。





Q4 一人一人がカリキュラム・マネジメントの主体であるためには？

カリキュラム・マネジメントは管理者だけの取り組みではありません。学校教育目標を実現するためには、教職員一人一人がカリキュラム・マネジメントの主体であることを意識しなければなりません。

そのための手立てや工夫として、校内研修をワークショップ型にすることを推奨します。研修をワークショップ型にすることで、当事者としての意識を高めることができ、共通理解を図りながら職員一人一人が主体的に授業改善やよりよい学校づくりについて考えやすくなります。

ただし、研修を実施する際は、なぜその研修が必要なのか、目的や意義を全職員でしっかりと理解しなければ、積極的で協働的な場は生まれにくいでしょう。また、全職員がカリキュラム・マネジメントの主体であるという意識を高めるためには、課題を共有し、教職員一人一人が自分ごととしてとらえる工夫が必要です。



Q5 カリキュラム・マネジメントは新しいものですか？

カリキュラム・マネジメントは、特別に新しい考え方や取り組みではありません。これまでも各学校で行われてきたことであると、先行研究で数多く述べられています。

確かに、これまでも「教科等横断的な視点」「PDCAサイクル」「人的・物的資源の活用」を通して教育活動の質の向上をまったく図ってこなかったわけではありません。

教育活動や経営活動の工夫改善については、特にカリキュラム・マネジメントと銘を打たなくても、これまでも各学校で行ってきたはずで。

ただし、自校の取り組みや個々の取り組みを俯瞰してとらえ、お互いにより影響を及ぼし合うように結びつけていたかについては、課題があったのではないのでしょうか。ですので、職員一人一人がカリキュラム・マネジメントの視点で自校の取り組みやそれぞれの取り組みを捉え直してみればどうでしょう。そうすることで、その取り組みの意義や価値に気付くことができ、お互いの良さを共有しながら協働的な取り組みにつなげることができると思います。



Q6 カリキュラム・マネジメントのキーワードは何ですか？

三つの側面「教科等横断的な視点」「PDCAサイクル」「人的・物的資源の活用」に共通することは、それぞれの要素をつないでいることです。つまり、この三つの側面は、教科と教科をつなぎ、計画・実行・評価・改善をサイクルでつなぎ、校内外の資源を活用して教育活動や経営活動の質の向上につなげています。また、この三つの側面は、学校教育目標の実現につなげるためのものでもあります。さらに、カリキュラム・マネジメントを推進するためには、全職員が学校教育目標や課題の共有化を図ることも大切であり、職員一人一人がつながりあってチームとなり、協働的な取り組みができる雰囲気も大切です。その他、カリキュラム・マネジメントの推進には、様々な要素や取り組みを、お互いにより影響を及ぼし合うように結びつけていくことも重要です。

また、田村（2016）も「『連関性（つながり）』は、カリキュラム・マネジメントを考える上で、最重要のキーワードです」⁽⁷⁾と述べています。

以上のことから、カリキュラム・マネジメントを考える際には、「つながり」を最も重要なキーワードとしてとらえておきたいです。



⁽⁷⁾ 田村知子 2016 「教科等横断的な視点によるカリキュラム編成」田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編者『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい（p. 85）

第Ⅳ章 資料編 資料編では、実践研究で実際に使用したワークシートや成果物などを紹介しています。

資料1 A小学校 校内研修

ワークショップⅠ 今年度の取り組みの成果と課題を学年で振り返る（各調査結果のデータを活用）

SWOT 分析 （ 学年）		演習
1. 組織： 小学校 2. 分析データ： 全国学調査調査・ASSESS 調査結果・学校評価等 3. 教育活動の方向： 学校経営計画 4. SWOT 分析		
内部環境（児童）	強み・良さ（Strength） + 要因	弱み・課題（Weakness） - 要因
外部環境（保護者・教師）	強み・良さ（Opportunity） + 要因	弱み・課題（Threat） - 要因

ワークショップⅡ 成果と課題、改善策をランキングにして全体で共有。

ランキング		2019 年度 取組 ランキング （ 学年）	
強み（良い点） ベスト3		弱み（改善点） ベスト3	
学級・学年の取組		学級・学年の取組	
1 位		1 位	
2 位		2 位	
3 位		3 位	
児 童		児 童	
1 位		1 位	
2 位		2 位	
3 位		3 位	



このワークシートは、今年度の取り組みの成果と課題を共有し、次年度の取り組みへつなげるためのものです。
 使い方や活用方法については、実践事例1（P ）に記載されていますので、ご参照ください。

参考資料

本ハンドブックの作成において参考にした主な資料です。

- 村川雅弘 2018 「1章 カリキュラム・マネジメントの基礎的・基本的な処方 22」村川雅弘編集『学力向上・授業改善・学校改革 カリマネ 100 の処方箋』教育開発研究所
- 山崎保寿 2018 「2 カリキュラム・マネジメントに関する先行研究および実践における階層的構造」『「社会に開かれた教育課程」のカリキュラム・マネジメント ―学力向上を図る教育環境の構築―』学事出版
- 大杉住子 2017 「次期学習指導要領の理解を深めるための9つの視点」『VIEW21 4月号 Vol.1 高校版』ベネッセ教育総合研究所
- 奈須正裕 2017 『「資質・能力」と学びのメカニズム』東洋館出版社
- 吉富芳正 2017 「第1章 学校における教育課程の意義」天笠茂編者『平成 29 年改訂 中学校教育課程実践講座 総則』ぎょうせい
- 天笠茂 2016 「新教育課程を生かすカリキュラム・マネジメント⑤」『新教育課程ライブラリ Vol.5』ぎょうせい
- 教育調査研究所 2016 研究紀要第 96 号「小中学校における『カリキュラム・マネジメント』の現状と今後の課題」
- 田村知子 2016 「“カリマネ”で学校をチーム化し、教育目標のよりよい達成を目指す」『VIEW21 8月号 Vol.3 高校版』ベネッセ教育総合研究所
- 田村知子 2016 「チーム学校によるカリキュラム・マネジメント」加藤崇英編者『「チーム学校」まるわかりガイドブック』教育開発研究所
- 田村知子 2016 「カリキュラムマネジメント入門」『月刊 高校教育 2016/May』学事出版
- 田村知子 2016 「教科等横断的な視点によるカリキュラム編成」「『チーム学校』が支えるカリキュラムマネジメント」田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編者『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい
- 村川雅弘 2016 「カリキュラムマネジメントの理解を深める研修の開発」田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編者『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい
- 吉富芳正 2016 「資質・能力の育成を実現するカリキュラム・マネジメント」田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編者『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい
- 田村知子 2013 「カリキュラム・マネジメントの手順と手法」村川雅弘・野口徹・田村知子・西留安雄編者『「カリマネ」で学校はここまで変わる!』ぎょうせい
- 田村知子 2011 「カリキュラム・マネジメントの実践方法」田村知子編者『実践・カリキュラムマネジメント』ぎょうせい

〈参考URL〉

- 文部科学省 中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm(2018年7月アクセス)
- 赤沢早人 2012 『「いい学校」の創り方 改訂版』
http://souken.shingakunet.com/career_g/2016/12/2016_cg415_d101.pdf(2018年11月アクセス)